

ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず(2)

三 戸 祥 子

Juliet: Love Passion with An Independent Mind (2)

Sachiko Mito

はじめに

今回、ここに発表させていただくのは、昨年、紀要第38巻への投稿機会を得て、『ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず』と題して発表したものの後半部です。

前半部においては、「結婚」というものをはっきりと志向する恋愛観，いわば近代的な恋愛観を抱いて，愛を求め，ロミオとの恋に強い主導性をみせたジュリエットを取り上げたのですが，この後半部においては，二人の愛が危機に瀕するに及んで，彼女は如何に振舞うのか，また，その愛は，終幕においてどのような到達点に至るのか。その点を追っていくことによって，劇中，ジュリエットなるものの中に描かれた女性人物像を浮き立たせようとするところに，主たる狙いがあります。

でき得る事なら，第38巻に寄せた一文と合わせて目を通していただける幸運を授かりますようにと願いつつ，序文に代わる「はじめのことば」とさせていただきます。

第五章 ジュリエットの弱さ：後朝の別れ

第二幕二場バルコニー・シーンにおいて，ロミオとジュリエットの間に関わされた190行に及ぶ求愛の言葉は，彼ら二人に，思いがけぬ「恋」に始まった互いの愛が偽りなき「真の愛」であることを確信させるに至る。だが，現実的な恋愛観を持つジュリエットにとって，愛の言葉を交わしただけでは本当の意味の確信と至福を約束してくれるものではない。「愛」をより揺るぎないものにするには，「結婚」という儀式——神の前にて永遠の愛の誓いを交わすという神聖なる儀式——を経なければならなかった。しかも，その神聖の誓いの後には夫と妻という現実的な生の営みが待っていた。そしてジュリエットが望んだのはまさにそのような愛の帰結であった。第二幕二場を，ジュリエットの視点に立って見るなら，そこには一貫して「結婚」を志向する恋愛観が見え隠れしていることに気付かされる。理想的な愛の成就のあり方を「結婚」に置こうとする考え方が潜在的に，そして最後には明白に，ジュリエットの言葉を通して表わされている。そしてこのような迷いのない恋愛観ひいては結婚観を持つジュリエットの方が，より強い牽引力を持って恋を導き，ついにはロミオを結婚へと向かわせるのである。

第二幕六場，恋人達は信頼を寄せるローレンス神父の立会いのもと，神聖な儀式を執り行い晴れて「夫と妻」となる（なかでも，ロミオは神父を敬愛しており，ジュリエットと愛を交わした後，迷わず彼のもとに走り，助言を求めている）^(注1) こうして，「結婚」こそ最高の愛の証しと信じ，男の愛の誠を測る最善の道と信じるジュリエットの願いは遂げられるのであるが，

その至福は長くは続かない。

第三幕一場、ヴェローナ大公から極刑に値する罪として堅く禁じられていたにも関わらず、血気にはやる若者達が路上での喧嘩騒ぎを引き起こす。その騒ぎに巻き込まれたロミオは仲裁を意図して、友のマーキューシオの死を招き、果ては逆上してその仇討ちとばかりにティボルトを刺し殺してしまうのである。ロミオを待つのは死刑、あるいは追放。大公の温情により死は免れて追放処分となるものの、神前にて夫婦の誓いを既に交わしたジュリエットとの別れは避けられぬ運命となってしまう。自ら招いたとはいえ、追放と別れの与える衝撃は耐え難く、ロミオはこの予期せぬ暗転に涙して己を見失いかけるほどである。しかし、衝撃を受けるのは、ロミオばかりではない。この思わぬ事件によって、永遠に続くものと約束されたはずのジュリエットの至福も一転、絶望の淵へと沈んでしまうのである。

第三幕五場、翌朝はロミオが追放の地へ旅立つというその前日、二人は僅かな時を共に過ごし別れを惜しむ。この場面に見るジュリエットは、あの第二幕二場バルコニー・シーンにおいて恋の導き手となった乙女ではなかった。ある種の強さ、明白な意思と自立性を感じさせる女性の姿は影を潜めている。

第二幕六場において、ローレンス神父の計らいで「結婚」の儀式を終えたロミオとジュリエットは同じ日の夜、人目を忍ぶ花婿が新婦のもとを訪れ契りを交わすはずであった。乳母の助力を得て手はずは整えられていた。縄梯子は部屋の窓から降ろされ、主人の訪れを待つばかりである。ところが、舞台が第三幕に移るや劇はそれまでの幸福感から暗転へと急降下する。ロミオの国外追放は、若者二人（マーキューシオとティボルト）の死に対する贖罪であった。彼は新妻の待つ褥に向かうはずが、流刑の地に向かうことになるのである。

アーサー・ブルック描くところのロミオは、初めから自分の意志と激情によって刀を抜き、ティボルトを刺し殺してしまうため、読者の共感を阻害する。(尤も、作者の意図はまさにそこにありはするのだが)それに比して、シェイクスピアの場合は、ロミオの善意による(マーキューシオ対ティボルトの喧嘩)仲裁が悲劇の発端となるように描かれている。そのため、殺人を犯した加害者ではあるが、いくばくか「被害者」としてのロミオ観が生まれる結果を生むのである。従って、シェイクスピアによる新たな人物マーキューシオの創造——ブルックに登場しない新しい人物創造——は、ロミオの性格創造に少なからぬ影響を与えていることが分かってくる。ロミオは浅慮一色の若者ではない。正義を知りつつも、十分な思慮を欠いたがために悲劇に身を投じてしまうのである。そこに観客や読者の共感を促す力が潜む。少なくとも、無意味な争いごとを避け、妻となった女の生家キャピレット家一族との和解を望むロミオは、思慮と無縁ではあるまい。とはいえ、結果としてティボルト刺殺の罪を犯すことに変わりはないのであり、追放の運命も免れることはできない。(注2)

従兄弟ティボルトの斬死、その死を招いた夫ロミオの追放という予期せぬ悲運は、ロミオに劣らずジュリエットにとっても耐え難い衝撃であった。しかし、彼女にとって最大の打撃は、一族のひとりティボルトの死ではなくロミオ喪失の恐れである。では彼女は、恋において発揮した主導性及び自立性をここでも保持して彼女自身の悲しみに耐え、窮地にある夫を救い導くのであろうか。否である。否と言うよりは、その要はないと言うべきか。第三幕五場、永久(とわ)の別れとなるかも知れぬ惜別の夜、逢瀬に姿を見せたロミオの頬の涙は既に乾いていた。むしろ涙の乾ききらぬのはジュリエットの方である。神父ローレンスの諫めによって、己を見

失い「女々しく」号泣するロミオは姿を消し，冷静さを取り戻して運めを受容する覚悟ができていた。

Juliet: Wilt thou be gone? It is not yet near day:
It was the nightingale, and not the lark,
That pierced the fearful hollow of thine ear;
Nightly she sings on yond pomegranate tree.
Believe me, love, it was the nightingale.

Romeo: It was the lark, the herald of the morn,
No nightingale. Look, love, what envious streaks
Do lace the severing clouds in yonder east:
Night's candles are burnt out, and jocund day
Stands tiptoe on the misty mountain tops.
I must be gone and live, or stay and die.

Juliet: Yond light is not daylight, I know it, I:
It is some meteor that the sun exhaled
To be to thee this night a torch-bearer,
And light thee on thy way to Mantua.
Therefore stay yet, thou need'st not to be gone.

(Act III, 5, 1-16)

一般に「後朝の別れの場」と言われるこの場面において際立つことは，ロミオとジュリエットの対照性である。一方は抗うことのできぬ運命に背を向けることなく受容しようとし，他方は抗うことなどできぬと知りつつ，その運命の到来を見て見ぬ振りをする。そして，ジュリエットの見せる弱さである。それは，二人の対照性を描くことによって現れてくる弱さでもあった。伝統的な意味での女の弱さという表現を当てることのできる弱さである。

人目を忍び別れの逢瀬を交わした二人にやがて朝が訪れる。朝日の昇る前に夫は発たねばならない。自然が目覚め，人がうごめき始めてしまつては，命がない。未だヴェローナに居ることが発覚すれば死刑である。だが，新妻は夜は明けぬと言ひ立てて譲らない。「ほら，聞こえるでしょう。あれはナイチンゲールの鳴き声，夜毎やって来ては向こうに見える柘榴の木の上で鳴くナイチンゲール。その鳴き声がいまだ夜の明けぬ証し」万が一にも朝が訪れたのであれば，あのナイチンゲールが鳴くはずはない，というわけである。^(注3) だが，夫は確かに夜がしられてきたことを知っていた。「いや，あれは雲雀の鳴き声。山の端に太陽の陽射しが掛かり始めた，見てごらん。ナイチンゲールはもうどこにもいやしない。」夜を灯す蠟燭は燃え尽き，代わって日が昇り朝の訪れを告げる。それは，別れのときがやって来たことを告げる「不吉」の知らせでもあった。

夜明けとあらば発たねばならぬ，留まれば死だ。「生きるためにはやむを得ぬ」と旅立とうとする夫を必死で引きとめようとする妻ジュリエット。あの明かりは朝日などではないのです，この私にはよく分かるのです。「夜道を照らしてあなたのマンチュアへの旅の安全を願う灯り」ちょうど松明を掲げるように，灯り (some meteor / a torch-bearer) をともしてあなたの発つ

時を待っているのです。「今しばらくここにいて下さいな。あの灯りが夜の証し、まだ旅立つには早すぎます」というわけである。ナイチンゲールといい、松明の灯り持ちといい、ジュリエットの味方であった。いずれも「朝」を退け「夜」を歓迎するための助け手である。ジュリエットの望みは引用文末尾の一行 *Therefore stay yet, thou need'st not to be gone* にすべてが込められている。それが、どれほど理に叶った願いであるか訴えんとして、夜の鳥 (nightingale) と夜の灯り (torch-bearer) に救いを求めたのである。

「行くな」と必死に引き止める女の言葉に、ロミオはままよ、死神に喰われんとばかり覚悟を決めようとする。彼は自暴自棄になったのではない。女の「愛」に応えんとして *Let me be tane, let me be put to death* と言うのである。

Romeo: Let me be tane, let me be put to death,
I am content, so thou wilt have it so.
I'll say yon grey is not the morning's eye,
'Tis but the pale reflex of Cynthia's brow;
Nor that is not the lark whose notes do beat
The vaulty heaven so high above our heads.
I have more care to stay than will to go:
Come, death, and welcome! Juliet wills it so.
How is't, my soul? Let's talk, it is not day.

Juliet: It is, it is, hie hence, be gone, away!
It is the lark that sings so out of tune,
Straining harsh discords and unpleasing sharps.
Some say the lark makes sweet division:
This doth not so, for she divideth us.
Some say the lark and loathed toad changed eyes;
O now I would they had changed voices too,
Since arm from arm that voice doth us affray,
Hunting thee hence with hunt's-up to the day.
O now be gone, more light and light it grows

Romeo: More light and light, more dark and dark our woes!

(Act III, 5, 17-36)

「捕われ、死して悔いなし」とロミオが言ったのは、別れを死以上に悲しむ妻の姿を目にしたからである。「旅立つよりも留まって共に過ごす時をいとおしむ」それを愛しい貴女が望むならば本望。ロミオもまた正直な思いは *I have more care to stay than will to go* (l.13) の言葉通り、愛するもののそばに留まることである。貴女が喜ぶなら自分は満足だと言うロミオは、その言葉を偽りなきものにするかのように、たった今妻を諭して「夜は明け朝の訪れを雲雀がその鳴き声で告げる」と言ったばかりのその言葉を打ち消してみせる。夜が白み始めたと思ったのは月明かりを映した明かり、二人の頭上高く、大空にこだましたのは雲雀ならぬ別の声。「死神など怖れるものか。」ジュリエットの望むことに応えることこそ我が幸せ、との思いがロミオにはあった。また、この予期せぬ別れを招いたのは他ならぬ己ではないか。「ここにいてくれ」と涙して懇願する女の頼みを拒むことのできぬ自分がいたのである。朝の訪れを謳う雲

雀の声，山の端を染め始める朝日を「否」と言い張る妻は（頑なで愚かと言わんよりは）むしろいとおしくさえあった。ロミオは自分の前言をこそ打消し，ジュリエットの望むすべてを与えることでその愛に応えようとしたのである。

いつときでも長く傍らにいて欲しいばかりに，雲雀をナイチンゲールと言い，朝日を夜と言って聞かぬ幼妻をついには受容するロミオ。愛あらば死など恐れぬと宣するロミオ。その姿を見て，ジュリエットが急変する。命の危険を背にしながら別れを惜しんで逢瀬にやって来た夫。理不尽な懇願をする妻を疎ましく思うこともなく，「おお，そうか，そうであろうとも」と望むままに受け入れ，「自分も思いは同じ，けっして離れたくはないのだ。」と自分と変わらぬ正直さで愛を語ってくれたのである。この愛しい人を死なせてなろうか。自分の我儘を，理不尽な願いをありのまま受け入れようとする夫に対して，にわかにいとおしさがこみ上げて来たに違いない。あれほど引きとめようとして自然の営みさえ否定したジュリエットが「留まってはならぬ，すぐにも発て」と叫ぶのである。

ロミオが死を覚悟して，「未だ夜は明けぬ，（心ゆくまで）二人して語ろうではないか」とそう口にしたかと思うと，即座に退ける。「（いえいえ）朝です，朝です。夜は明けたのです。」（調子はずれに）鳴くのは雲雀です」確かに夜は明けていた。それを拒んでいたのはジュリエットただ独り。「はやくはやく，お急ぎなさい。（追っ手の来ぬまに）はやく行って！」ジュリエットはもはや満足であったろう。夫の *Come, death, and welcome! Juliet wills it so. / How is't, my soul? Let's talk, it is not day. (ll.24-25)* という言葉は偽らぬ愛の宣言でなくて他の何であろうか。ロミオが感じたいとおしさに劣らぬいとおしさを，この時ジュリエットは彼に対して感じたに違いなかった。そして，愛の誠を確信し安堵してもいた。そうであるからこそ，「逃げよ，生き延びよ」と叫び，辛い別れを耐えて再会の幸せを待とうと自分に言い聞かせるのである。

こうした実に不安定な心情を露わにするジュリエットは，第二幕六場の婚礼の儀を挙げるまでの彼女とは異なる一面を見せていることは確かである。自分を自分で支えきれず誰かに取りすがろうとする弱さ，それはいわば伝統的な意味での女性的な弱さとも言うべき弱さである。第三幕五場，ロミオが立ち去った後，独り残されたジュリエットが運命の女神の力を怖れて *Be fickle, Fortune: / For then I hope thou wilt not keep him long, / But send him back. (ll.63-66)* と言う時，そこにもやはり同様の弱さを窺うことができる。その言葉には運命に身を委ねる受動の姿勢はあっても，己の運命に逆らってもその気まぐれの横暴を遮ろうとする強さはない。何故かロミオの死の予感に捕われたジュリエットは「できることなら，はやく（気まぐれで知られる）運命の女神が愛しいあの人をその両の手から放ってくださいように」と，大いなる力を畏怖し，自己を卑小なものと感じて嘆息するかのようである。

第六章 孤独のジュリエット：自立

第三幕五場，ロミオが追放の身となってマンチュアに旅立った直後，母キャピュレット夫人が悲しみに暮れるジュリエットの元にやって来る。娘の涙が甥（夫人の甥）ティボルトのために流される涙と信じる母は，その悲しみを癒すために最善の薬を持参したと言う。

Lady Capulet: Marry, my child, early next Thursday morn,

The gallant, young, and noble gentleman,
The County Paris, at Saint Peter's Church,
Shall happily make thee there a joyful bride.

Juliet: Now by Saint Peter's Church and Peter too,
He shall not make me there a joyful bride.
I wonder at this haste, that I must wed
Ere he that should be husband comes to woo.
I pray you tell my lord and father, madam,
I will not marry yet, and when I do, I swear
It shall be Romeo, whom you know I hate,
Rather than Paris. These are news indeed!

(Act III, 5, 112-125)

母の言う「最善の葉」とは父の勧める縁談の相手パリスとの結婚であった。次の木曜日の早朝、聖ピーター教会で式を挙げることに決まったというのである。母は、伯爵パリスとの結婚は必ずやジュリエットを幸せな花嫁にしてくれるはずだと信じて疑わない。だが、母の期待に反して娘のジュリエットは激しい拒絶の言葉を返す。まずは母の言葉を取って、「聖ピーター教会にかけて」嫌であると拒み、その性急さを責める。夫になる男からの求愛など一度も受けてもおらぬのに結婚とは乱暴な話。何故これほど急ぎ、見知らぬ人の元へと娘を急き立てるのか？一理ある反駁である。更にジュリエットは、結婚そのものを否定してこの難を逃れようとする。引用文第123行 I will not marry yet という言葉がそれを示している。相手が誰であれ目下のところ自分には「結婚の意志などない」のであると。それは一方では、暗に、父の与える縁談そのものに不足があるのではないことを含ませた言葉であるかもしれない。そうであるとしたら、ジュリエットは14歳にして油断のならぬ頭の良い娘である。尤も、この後すぐに分かるように父の怒りを和らげることはできないのだが。そして彼女は、I will not marry yet という言葉に続いてこう言う——when I do, I swear / It shall be Romeo, whom you know I hate / Rather than Paris. それは、「結婚の否定」よりも更に重大な宣言であった。

その言葉は表面的には、結婚を強く拒むための方便となっている。「(仮に、あるいは万一)自分が結婚するとしても、その相手はパリスであるよりも、血を分けた親族ティボルトを殺めた憎き男ロミオを望む」とは「死」にも等しい思むべき決断を意味することになる。意に反して結婚を強いられるなら、死んでしまいたいほどである旨を、目の前の母に告げようとする意図がそこにはある。そして、娘ジュリエットの涙の原因がティボルトの無念の死にある、と信じるキャピュレット夫人にとって説得力のある言葉となるはずであった。ああ、それほどまでに「結婚」が嫌であるのか。悲しみを和らげると期待したのは見当外れ、あまり強いてもなるまい、と。(当初、すなわち第一幕三場では「縁談話」を名誉な事として暗に喜ぶ風のあったジュリエットと矛盾してはいる)ただ哀しいことに、結果としては娘の思惑通りには事は運ばぬのである。

しかし、その言葉の裏にはもう一つ別の意味が込められてあった。ジュリエットが when I do, I swear / It shall be Romeo という時、実は「結婚できぬ本当の理由」を語っているのである。キャピュレット家の一族すべてが、その命を奪ってもなお恨みの晴れぬほどに憎いあの男、ほかならぬロミオと自分は結婚しているのであり、それがために他の誰とも結婚できないのであ

る，と。いや，「できぬ」というよりは他の誰とも結婚する「意思などまったくない」のである，と。愛する人は唯ひとり，故に結婚したいと願う人もこの世に唯ひとり。そして現に私は，その愛しい御方ロミオ様と結婚しているのです！ジュリエットは心よりそう叫びたかった。正直な気持ちと事実を口にしたくともできない悲しさと口惜しさ。それが，あの，言葉に二義を含ませた表現 when I do, I swear / It shall be Romeo, whom you know I hate となって現れたのであった。末尾の whom you know I hate が加わることによって，聞き手キャピュレット夫人の胸に猜疑の心が浮かぶ恐れを摘み取ってくれる。この5つの語が語り手の真意を，覆い隠してくれる。それでいて，嫁いでいくのは「愛しい人口ミオ」をおいて他にないとの思いを表していてもくれるのである。少なくとも，ジュリエット自身の耳には真意を伝える声の方がより強く響いていたはずである。

だが，こうした複雑な感情と思惑を絡めたジュリエットの哀しい訴えは母を動かすことはできなかった。母の目には，これ以上の縁談はないと信じて進めた縁談，悲しみを癒すと信じて結婚の儀を勧めた親の心を知らぬ「恩知らずの娘」としか映らなかったのである。「お父様がどうおっしゃるか，自分で確かめてごらん」と言って，裁定は当主キャピュレットに託す夫人であったが，予測できる夫の怒りに同調する感情を抱いていることは疑いない。それは，あくまでパリスとの婚礼を拒んだため，終に父に身捨てられてしまう娘が母に助けを求めてすがるとき，Do as thou wilt, for I have done with thee. (1.203) と言い捨てるその言葉に明らかである。そして，ジュリエットにとっての更なる不幸は，父母に見捨てられるばかりか，一番の助け手であった乳母さえも，もはや心を許せぬ相手であることを思い知ることである。

当主キャピュレットの怒りと呪いの言葉：我が娘遺棄

さてジュリエットは，思いがけずパリスとの婚礼を告げられ，激しく抵抗したのであったが，そこへ当主キャピュレットが現われる。彼は，幸せの笑みを満面にたたえ，涙を流したことなどすっかり忘れてしまった娘の顔を思い浮かべてやって来たのである。娘は，母親の持ってきた幸せ（を約束する知らせ）に狂喜したはずであった。

Juliet: Not proud you have, but thankful that you have:
Proud can I never be of what I hate,
But thankful even for hate that is meant love.

Capulet: How, how, how how, chopt-logic? What is this?
'Proud', and 'I thank you', and 'I thank you not',
And yet 'not proud', mistress minion you?
Thank me no thankings, nor proud me no prouds,
But fettle your fine joints 'gainst Thursday next,
To go with Paris to Saint Peter's Church,
Or I will drag thee on a hurdle thither.
Out, you green-sickness carrion! Out, you baggage!
You tarrow-face!

(Act III, 5, 146-157)

父キャピュレットは母以上に，婉曲な表現に込められた言葉の真意を読み取ることでできぬ

人であった。「私の為に考えてくださったこと（パリスとの婚礼を指す）を喜ぶことができない私ですけれど、お父様が骨を折って下さったことには感謝いたします。」引用文第 146 行目、Not proud you have は、言葉を補って I am not proud of what you have done for me あるいは、I am not proud of what you have given to me としてその意を汲めばよいであろうか。^(注4) ジュリエットには、なんとしても「結婚」は受け入れるわけにはいかないという思いがあった。しかし、父の愛をありがたいと思わない訳ではなかった。だからこそ、親であるが故に愛娘のために心をくだき、その幸せを願って良縁を探し求めてくれた父に対して、心より感謝することを忘れたのである。ジュリエットは更に言葉が続けて「愛情という善意」から発した父から娘への「思いやり」が、当の娘には忌むべき悪しき贈り物に転じてしまったことを告げる。辛くとも彼女は自分の本意を偽るわけにはいかなかった。引用文第 147-148 行に見られる強い言葉 never, hate にその堅い決意（結婚への拒絶）が表れている。但しここでも、父親の行為は親が子に注ぐ「愛」の証しであることを娘の自分は重々分かっている、いや、感じてもあることを伝えようとするのであり、そのことを我々は見逃してはならない。「私は自分が忌み嫌う事、どうしても喜ぶことができない事を誇らしく思うことはできないのです。でも、たとえ嫌な事であっても本当に有難いと思っています。お父様が、愛情から心をくだいて下さったことなのですから。」

ジュリエットはおそらく、初めの一行 Not proud you have, but thankful that you have (ll.146) だけでは十分に意が尽くせないと感じて、すぐに言葉を補って Proud can I never be able of what I hate, / But thankful even for hate that is meant love. (ll.147-148) と言ったものと思われる。前者では、明確な結婚拒絶の意志と決意を宣し、後者では、その決意に関わらず、父の深く誠を尽した愛に対する感謝の意を伝えようとしたのである。だが、そうしたジュリエットの複雑な心境は父には理解できず、混乱をきたしただけであった。その混乱は憤激を生み、有無を言わせぬ絶対命令を娘に対して下させることになる。当主キャピュレットの耳には、「恩知らずの娘」が口にする身のほど知らずの愚かな言葉としか聞こえなかったのである。

第一に、娘の言っている事は辻褄の合わない戯言ではないか。お父様のして下さったことは「嬉しくも誇りにもできないことですが、感謝しています」だと？ 感謝し有難いと思っていながら、儂の見つけてきてやった最高の縁談など「嬉しくないので要らぬ」とは、一体どういうことだ？ 一人娘ジュリエットの喜ぶ顔を期待して彼女の部屋にやって来たキャピュレットは、話の筋の通らぬ戯言 chop-logic に出迎えられて混乱し、ついには怒りを爆発させる。

引用文中、キャピュレットの言葉の後半部 (ll.152-157) は怒りの吐き出させた専制君主のものであった。「儂に（心にも無い：（ ）内は筆者）感謝などせずともよい。名誉とも思わぬことなら喜んでもらう必要はない」父親には、このパリスとの婚礼が（あれほど苦勞して探して来た縁談だというのに）娘から喜ばれてもいなければ、有難いとも思われていないことだけははっきりと分かったのである。勞の報われぬ悲しみよりも「怒り」の方が大きかった。父である前に、キャピュレット家の当主である自分の意向が拒まれ、無視されることなど到底承服できることではない。木曜日に決定した結婚の儀は何があろうとも決行して、家長の絶対的な力と權威を思い知らせてやらずにおくものか。「か細い脚を木曜に備えていたわっておけよ。パリスと連れ立って聖ピーター教会へ行くんだ」当人が嫌がろうとどうしようと力づくで引きずってでも式場に向わせる気でいた。[Y] our fine joints と言う時、その fine は決して繊細さを誉めようとした言葉ではなく、むしろ「役にも立ちそうにない」脚をした「口だけ達者な」小

娘め、といった侮蔑の意のこもった語である。父の怒りは更に、娘を罪人扱いして憚らない。「(歩かぬと言うなら；行かぬと言うなら) 罪人を刑場に引く板の上にも縛り付けてこの儂が連れて行く」そして終には、家長としての絶対権の執行を宣言するだけでは満足がならず、最後に罵りの言葉 *You tarrow-face!* を吐き出すように加えるのであった。*tarrow-face* とは、「硫黄病(萎黄病)」を連想させるジュリエットの蒼ざめた顔色を見て発した言葉と思われるが、これはもはや血を分けた娘を相手にしているのではなく、不倶戴天の敵を前に吐き出す悪態に等しい。(注5)

この言葉にさすがの夫人も——いくら「恩知らずな娘」と思いはしても——「気でも狂ったのですか？」と思わず問いただすほどであった。そしてその危惧通り、この後のキャピュレットは己の怒りを統御できぬまま、猛り狂った猛獣の如く変じていくのである。

Juliet: Good father, I beseech you on my knees,
Hear me with patience but to speak a word.

[*She kneels down.*]

Capulet: Hang thee, young baggage, disobedient wretch!
I tell thee what: get thee to church a' Thursday,
Or never after look me in the face.
Speak not, reply not, do not answer me!
My fingers itch. Wife, we scarce thought us blest
That God had lent us but this only child,
But now I see this one is one too much,
And that we have a curse in having her.
Out on her, hilding!

(Act III, 5, 158-168)

想像を絶する父の怒りに触れて、ジュリエットは膝を折りその慈悲心にすがろうとする。「お願いですから、どうぞ私の話を聴いてください」決して「一言 (a word)」などで語れるものではないであろうが、切なる願いをそこに込めてすがるよりほかなかった。だが注意すべきは、彼女が謝罪の言葉を一言も口にしていないことである。先刻の訴えを言葉を変えて繰返すであろうことは火を見るより明らかであった。それを瞬時に感じ取ったからこそ、父キャピュレットは微かな期待を裏切られ怒りを増幅させるのである。「首でも括ってしまえ、このろくでなし！」と新たな罵りを叩きつけると、更にこう言う「親に逆らう恩師らず娘! (disobedient wretch! (l.160))」この言葉こそ今のキャピュレットの心情を端的に表わすものはない。彼が尤も嫌悪し憤怒したのは娘の反抗(不従順) *disobedience* なのである。彼の知るジュリエットは、姿形の美にも恵まれ、純真で貞節を知り両親には従順を示す娘、内なる美と外なる美とあわせ備える理想の乙女であった。それがなんという変わりようか! 「女」になくてならぬ美德のひとつ「従順さ」を失ってしまったのである。こともあろうに尤も敬意を払い絶対服従をもってその「愛」に報いねばならぬ当主、父親に向って反抗の牙を剥いたのである。まさしく *disobedient wretch* であった。

今や、不従順の娘などその顔を見るだけでも虫唾が走る父は、*Speak not, reply not, do not answer me!* (l.163) と声を荒げて一切の言葉をジュリエットから奪い、声を封じてしまう。そ

して引用文の後半、今度は怒りの矛先を妻に転じるのである。それは落胆と悲しみに姿を変えた怒りであった。神から授かった子が唯ひとりであったことを「幸運」とは思えぬことの方が多かった我等夫婦であったが、(こうして恩知らずの娘を見ることになろうとは)今や、たった一人の子に煮え湯を飲まされる思い—— 独り子でも持て余す思いよのう。今の彼には、ジュリエットは呪いの子であった。親を親と思わぬ不服従の娘ジュリエットを授かったことは呪わしい災いだと嘆息するのである。人称代名詞を *we* としていることから、キャピュレットが妻に同意、共感を求めていることが窺える。そしてここでも最後には、ジュリエットを今後一切無視すると決めながら、罵りを口にしないではおれない父である。しかも今度は「出て行け」という言葉と共に吐き出されている。Out on her, hilding! (l.168) 卑しい下女の如く呼ばれることも耐えがたいであろうが、「(この家から) 出て行ってしまえ」と通告されることは、「死ね」と言われるに等しい衝撃を与えるに違いない。14歳という未だ少女の域を出ぬほどの小娘が、生家を着の身着のまま追われてどう生き延びると言うのであろうか？

たまりかねた乳母がここで口を挟む。お嬢様になんということをおっしゃるのか。乳飲み子から育てた自負と愛情が彼女に勇気を与えたか、You are to blame, my lord, to rate her so. (l.169) と、はっきりと主人を責めるのである。しかし無論のこと、使用人の分際で口が過ぎるとばかり、尚更当主の怒りは煽られ、己の非を認めるどころか「おしゃべり女め、黙れ！」と怒鳴らせることになる。そして、落着かせようとする妻の言葉も火に油を注いだ結果となってしまうのであった。寝ても冷めても娘の安寧を願って、幼少の頃より良縁を求めて四方八方手を尽くしてやっと苦勞が報われるかと安堵すれば、「結婚などイヤです。あの方、愛せませんわ」などと抜かし裏切りを働く。「まだ私結婚には早すぎます。ご容赦ください。」だと？ 利いた風な口を叩くでない、身のほど知らずめ。

報われぬ親の愛をさんざん嘆いた後、得心したかのようにキャピュレットは娘ジュリエットに最後通告を言い渡す。

Capulet: But and you will not wed, I'll pardon you:
Graze where you will, you shall not house with me.
Look to't, think on't, I do not use to jest.
Thursday is near, lay hand on heart, advise:
And you be mine, I'll give you to my friend;
And you be not, hang, beg, starve, die in the streets,
For by my soul, I'll ne'er acknowledge thee,
Nor what is mine shall never do thee good.
Trust to't, bethink you, I'll not be forsworn.

(Act III, 5, 187-195)

この引用文を見たとき、まず我々の目を引くのは人称代名詞 *you* である。キャピュレットはジュリエットを *thou* をもって呼ばないのである。もはや親子の親愛、親密さを打ち消した如き言葉の用い様である。^(注6) そしてその一見小さな変化に見える人称代名詞の変化は、確かに親子の縁を断ち切るという絶え難い選択を暗示するのであった。この小さくは見えるが、実は大きな変化をジュリエットに自覚させるに足りるものである。突如として父親が、娘の自分に対して「他人行儀」のよそよそしい呼びかけを行なう (*thou* でなく *you* を用いる) というこ

とは、そこに娘を見限ってしまおうとする父の意図を感じないではおれないはずであるから。

だが反面、引用文第 190 行末尾 *advise* という語に注目すると、キャピュレットが父として娘によく考えて、どうするのが自分にとって一番良いことか決めよと、なお再考を促していることが分かる。先刻の「出て行け」とは言葉の勢いから発した叫びであって、真意はジュリエットの翻意にある。引用文冒頭の「望まぬなら、結婚しなくて良い、赦してやる」とは真っ赤な偽りであり、実は親に従い「結婚」を選んで欲しいのである。しかし、その説得は「路上で野垂れ死に」を暗示して脅迫の形を取る。「結婚」をあくまで拒むならもはや親でも子でもない、赤の他人同様、無論、財産も一切受け取れぬと覚悟しておけというわけである。こうした「縁切り」という脅迫めいた説得が当然の如く行なわれるのは、キャピュレットに家父長の権限は家族の生世与奪を握っているのだという絶対者としての所有意識があるためであろう。彼の *And you be mine, I'll give you to my friend* (l.191) という言葉は娘は（「現に我が子に間違いなければ」：この言い回しには皮肉めいた調子がある）自分の所有物であり、財産のひとつであるが如く、己の望む相手に花嫁として当てがう事ができることを示している。また逆に我が子でないと言うならば、自分の庇護する責任もなければ、あちら（今や見知らぬ子となった娘）にも庇護を望む権利もあるはずもない。自由にできぬ財産など守る意味もない。赤の他人であることを望むなら、好きなどころに出でて放浪し餓え、はては野垂れ死にの運命に身を委ねるがよい。そして、自分は「本気である」と釘を刺すことを忘れない。わしは冗談など日頃から口にせぬ男だ。一時の戯れ、いずれ翻すなどと甘い考えは捨てることだ。キャピュレットは本気であることを *Look to't, think on't, I do not use to jest* (l.189) / *Trust to't, bethink you, I'll not be forsworn* (l.195) と引用文の初めと終わりに二度念を押している。

さて、不服従の娘に語る際、人と人との間に「隔たり：距離」を感じさせる人称代名詞 *you* に始まり *you* に終わったキャピュレットの言葉は、どのような決断をジュリエットに迫ることになるのだろうか。

母からの訣別： ジュリエットの自立へ

父キャピュレットが最後通告の言葉を残して立ち去ると、父親から遺棄されたように感じたジュリエットは、母に助けを求める。「お母様だけは自分を見捨てないでくれ」と。

Juliet: Is there no pity sitting in the clouds
That sees into the bottom of my grief?
O sweet my mother, cast me not away!
Delay this marriage for a month, a week,
Or if you do not, make the bridal bed
In that dim monument where Tybalt lies.

Lady Capulet: Talk not to me, for I'll not speak a word.
Do as thou wilt, for I have done with thee.

(Act III, 5, 196-203)

父を頼みにできないことがはっきりしてきた今となつては、母に力を貸してもらうより救いの道はない。しかし、ジュリエットが大空の雲の下、この世に「私の悲しみの深淵 (the bottom

of my grief (1.197))」を覗き見て、哀れを感じてくれる人は誰一人いないのか、と嘆くその言葉は、父親との断絶と遺棄を嘆くと言わんよりは、己自身の愛の成就を守りぬく道(すべ)を絶たれた——このままでは絶たれてしまう——ことを嘆く言葉であることを見逃してはならない。O sweet my mother, cast me not away! と叫んで母の救いを求めたその後続く言葉を見れば明らかである。「一ヶ月、それが無理なら一週間だけでいいから」婚礼を延ばして欲しい、と訴えるのである。更に、いえ、それが聞き入れられないなら、せめて新婦の「新床」はティボルトの眠る遺体安置所に用意して下さいな、と暗に「死」の覚悟をほのめかして母に情けを求め、救いを迫ってさえている。「結婚」を承諾しても時の猶予さえ許されぬのなら、自分は「死」を選びたい。「我が子」の死を願うはずのない親の情に訴えようというのである。だが、この必死の訴えに母の心はまったく動かされることはない。「何を言っても無駄です。お前とはね、もう口を利くつもりなどありませんよ」キャピュレット夫人は娘を見限ったと言い捨ててその場を立ち去るのである。

キャピュレット夫人の言葉は二行に満たぬ、非常に短いものであるが、逆説的な衝撃をもたらすに十分である。引用文の末尾 I have done with thee は、父親であるキャピュレットの長い呪詛以上にジュリエットに対する遺棄の印象を強く、そして効果的に与えている。母を介しての父説得の望みは完全に絶たれたのである。もはや、座していたのでは木曜の婚礼の日にパリスの花嫁となる道しか残されていなかった。それを逃れるためには別の道を考えるより他ない。ただ、たったひとりで決行する勇気を未だジュリエットは持たなかった。

乳母の裏切り： ジュリエットの自立

「おまえのことはもう諦めた。もう知りませんよ」という言葉と共に母が立ち去ってしまうと、「藁をもすがる」思いで乳母の方を振り返るジュリエットであった。

Juliet: O God! — O Nurse, how shall this be prevented?
My husband is on earth, my faith in heaven;
How shall that faith return again to earth,
Unless that husband send it me from heaven
By leaving earth? Comfort me, counsel me.
Alack, alack, that heaven should practise stratagem
Upon so soft a subject as myself!
What say'st thou? hast thou not a word of joy?
Some comfort, Nurse.

Nurse: Faith, here it is:
Romeo is banished, and all the world to nothing
That he dares ne'er come back to challenge you;
Or if he do, it needs must be by stealth.
Then since the case so stands as now it doth,
I think it best you married with the County.
O, he's a lovely gentleman!
Romeo's a dishclout to him. An eagle, madam,
Hath not so green, so quick, so fair an eye

ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず(2)

As Paris hath. Beshrew my very heart,
I think you are happy in this second match,
For it excels your first, or it did not,
Your first is dead, or 'twere as good he were
As living here and you no use of him.

(Act III, 5, 204-225)

何かせめて慰めになるような言葉が欲しいと乳母に甘えるようにするジュリエット。Comfort, a word of joy という言葉そのものがその心情をよく表している。しかしここでも、実は彼女が求める「慰め」あるいは「良き考え」とは、単なるその場限りの優しい言葉ではなく、望まぬ結婚の阻止を可能にする何らかの手立てを指すことは明らかである。引用文冒頭 how this shall be prevented? という言葉の中の this は言うまでもなく、パリスとの婚礼を指している。どうすれば迫る木曜の難を逃れられるものか、知恵を授けて欲しいと、乳母に向ったのである。^(注7) その問いかけに応じた乳母の与えた「慰め」とは驚くべきものであった。

乳母は、死んだも同然のロミオを捨て、パリスとの結婚を勧めたのである——I think you are happy in this second match (1.222) と事も無げに言って。要は、追放の罰を帯びてヴェローナを追われたロミオはいまや死んだも同然。乳母の目には「夫」として頼るべき価値をもたぬ男に変じたのである。それに比して、伯爵パリスは身分の高さはもちろんのこと、外見も美しく前途洋々である。乳母が殊更に Paris と言わず the County (1.217) と言及していることに注目しなくてはならない。お嬢様の花婿候補が「伯爵」の地位にあることこそ嫁ぐ相手としての価値を保証するものに他ならないからである。ロミオとの結婚は秘密の挙行であり、立ち会った神父と仲介役の自分、そしてジュリエット自身が自ら口を封じさえすれば問題はない、とでもいうかのように I think it best you married with the County (1.217) と言ってのけ、幸福を約束する this second match を選ぶのが最善だと言うのである。第一の結婚相手ロミオはいまやジュリエットにとって of no use なのであるから、亡きものとして（乳母は現に Your first is dead (1.224) と言っている！）忘れろ、と言うわけである。

Some comfort, Nurse と固唾を飲んで体のすべてを耳にして聞き入るジュリエットは一瞬己の耳を疑った。

Juliet: Speak'st thou from thy heart?
Nurse: And from my soul too, else beshrew them both.
Juliet: Amen.
Nurse: What?

(Act III, 5, 226-229)

「本心か？」と問い質すジュリエットの言葉を懐疑の念から出た言葉とは思わなかった、おそらく思わなかった乳母は「まっこと、魂の底から誓ってもよござんす」と答え、更にたった今お嬢様に申し上げた「最善の結婚」の勧めが嘘偽りなどであったなら、私の「心 (heart)」であれ「魂 (soul)」であれ神の罰を受けたって構いません。とまで付け加えたのである。先刻、I think it best you married with the County と言った乳母の声を、一瞬聴き違ったかと混乱に襲われたが、まさしく「本心」であったとは！ あれが乳母の本心からの言葉と知るや、ジュ

リエットは反射的に「そうなりますように」と祈りの言葉を口にする。Amen という語は So it be と言い換えるなら、乳母の else beshrew them [my heart and my soul] both ([] は筆者) に呼応して「お前の願い通り祟りが降りかかりますように」となる^(注8)。愛するロミオを捨て去れと勧めるばかりか、神の前の誓いを破って重婚の罪を冒すことまで勧めるとはなんという「罰当たり」。身も心も神の怒りに触れて滅びてしまえ、とばかり呪った祈り Amen である。だが、お嬢様の慰めと救いを差し出したと信じて疑わない乳母に、そのような呪いの罹った祈りなどジュリエットの口から漏れようなど想像もできないことであった。

Juliet: Well, thou hast comforted me marvellous much.
Go in, and tell my lady I am gone,
Having displeased my father, to Lawrence' cell,
To make confession and to be absolved.

Nurse: Marry, I will, and this is wisely done.

Juliet: [*She looks after Nurse*]
Ancient damnation! O most wicked fiend!
Is it more sin to wish me thus forsworn,
Or to dispraise my lord with that same tongue
Which she hath praised him with above compare
So many thousand times? Go, counsellor,
Thou and my bosom henceforth shall be twain.
I'll to the Friar to know his remedy;
If all else fail, myself have power to die.

(Act III, 5, 230-242)

「え？ 何でございます？」と怪訝な顔をして聞き返す乳母の方に向き直ったジュリエットは、既に別人であった。乳を含ませ「お嬢ちゃま」と言って抱っこした幼児の面影はすっかり消え失せていたのである。ジュリエットの口から出た言葉は完全に乳母を欺く言葉。見事な演技で素顔の自分とは別の人格を演じてみせる女優のものであった。What? と聞かれて「まあ、お前。お前のお陰ですっかり楽になりましたよ」と答える少女は鮮やかな変身を果たしていた。「ええ、ええ、本心ですとも」この乳母の返答は決定的に「乳母不信」の念を彼女に抱かせていたのである。そして一瞬のうちに、この善良だが二枚舌の乳母を切り捨てる決心をさせたのである。もはや乳母も信用がならない。心のうちをありのまま打ち明け助言と助力を求める相手を完全に失ったことを自覚したジュリエットは、独りで「婚礼」の呪縛を断ち切る方法を求める決意をする。瞬時の決意が語らせたのが Well, thou hast comforted me marvelous much という言葉である。そしてその時既に、次の欺きの言葉を用意していた。

「お父様をすっかり怒らせてしまった、その親不孝の罪を懺悔するつもりです」ジュリエットは、ローレンス神父の庵を訪ねて悔い改めの祈りを挙げ、神の許しを得るため出かけたとキャピュレット夫人に告げるよう言い置く。「よくおっしゃいました」と幼児を誉めるようにお嬢様の良き心掛けを称えて乳母が立ち去ると、独りになったジュリエットは役者の仮面を脱ぎ捨て「裏切り者! (Ancient damnation! (1.235))」と叫ぶ。

「数え切れぬほど幾度も幾度もロミオを褒め称えたはずの己の言葉を忘れたとは言わせぬ」

との思いがジュリエットの胸の内にはあった。乳母はたった今、その同じ舌でパリスを褒めちぎったのである。しかもロミオを「皿拭き巾 (dishclout: 1.219)」に譬えて愚弄し、パリスは鳥獣の王「鷹 (eagle: 1.219)」に譬える雄々しき男と崇めたのである。ジュリエットをして乳母を欺かせたのは、まさに乳母自身のこの裏切り行為であった。神聖な結婚の誓いを「反故」にし、重婚を誓わせようなどと企む乳母こそ悪魔の申し子 (a most wicked fiend: 1.235)、神をも恐れぬ罰当たりでなくて何であろう。

それにしても、乳母が奥様にお伝えします (ジュリエットの翻意を) と立ち去るのを見届けるや、Ancient damnation! と叫ぶ瞬間のジュリエットは圧巻である。「本当に助かったよ。おかげで気持ちがお楽になったからね」(Well, thou hast comforted me marvelous much) とさらりとやってのけたあの瞬間のジュリエットに次ぐ圧巻である。誰の手からも自由な、独立自存の女に変じる瞬間である。ひそやかに、乳母の天罰を祈った呪い Amen に始まった乳母からの自立はこうして激しく劇的な形で遂げられることになる。いまや彼女は、頼むに足りぬと断じた乳母を指して「とんだ助言者よ (counselor)」と皮肉を込めて呼ぶこともやってのける。二人の心はひとつ——と信じるほどに結ばれたその固い絆はもはや完全に断ち切られたのである。

ローレンス神父の庵に向うジュリエットにとって、「懺悔」とは勿論のこと隠れ蓑。神に誓ったロミオとの結婚の証人に最後の望みを託し、運命の手を逃れるための知恵を借りようと訪ねるのであった。それも叶わぬとなれば、そのときこそ己一人の力で我が身を処す覚悟でいた。「万策尽きようとも、我が命絶つ道はこの手にある」と己に言い聞かせつつ、庵を目指すジュリエットであった。

第三幕五場後半は全体でおよそ176行から成る場面であるが、この一場面の中に、ジュリエットの両親からの訣別、乳母との訣別、そしてそれに伴う自立へと、実に劇的に精神的变化が描かれている。彼女の決断の早さ、潔さは目を見張るばかりである。しかも、用いる言語表現の巧みさにも注目すべきものがある。それは引用分析を通して確かめて来た通りである。第三幕五場冒頭「後朝の別れ」で垣間見せた弱さは再度影を潜め、本来身に備わった自立性が「孤独と窮地」に遭遇して頭をもたげ、さらに強さを増していくのであった。

第七章 ジュリエット： 死の覚悟

第三幕五場の終わり、立ち去っていく乳母の背に向かって (当人には聞こえぬように) 不誠実をなじたジュリエットは、その足で神父ローレンスの元へと急ぐ。第四幕一場、神父の庵に着いてみれば、なんとそこには親の定めた婚約者パリスの姿があった。一刻も早く神父からの救いを得たいと願ってここまで辿り着いたジュリエットに、またしても試練が待っていたのである。

Paris: Happily met, my lady, and my wife!
Juliet: That may be, sir, when I may be a wife.
Paris: That 'may be' must be, love, on Thursday next.
Juliet: What must be shall be.
Friar Lawrence: That's a certain text.
Paris: Come you to make confession to this father?

Juliet: To answer that, I should confess to you.
Paris: Do not deny to him that you love me.
Juliet: I will confess to you that I love him.
Paris: So will ye, I am sure, that you love me.
Juliet: If I do so, it will be of more price,
Being spoke behind your back, than to your face.

(Act IV, 1, 18-28)

ジュリエットの顔を見るなり、パリスは喜びの声を挙げる。「なんという幸運！私の愛しい人、そして私の妻にここでこうして会えるとは！」パリスの my wife という呼びかけにジュリエットはなんと応えるべきか？相手の言葉をそのまま受容してしまえば、ロミオと交わした愛の誓いを欺き汚すことになる。かと言って、「愛しの人」「妻」と呼ぶことを禁じれば、たちまち疑いを相手の心の中に呼び起こしてしまう。自分の心を偽ることなく相手を満足させる返答は何か？引用文第二行目「私が妻になる日が参りましたら、そうなる（あなたの妻になる）こともありましょう。」それは確かに、目下の事実と反することのない、ありのままを告げた言葉である。その点、偽りはなく、少なくとも言葉の表面上の意味においてはそうである。しかし、それでいて、パリスの妻になぞなりたくはない、という真意（本心）を言葉の陰に潜めた曖昧な言い回しとなっている。更にパリスが「その「もしも」は、木曜日には「必ず」となるはず」と続ければ、「必ずそうなるものでしたら、（そうなることを）避けることはできませんわね」と、ジュリエットが応じる。ここでも、what must be shall be (l.21) といった運命を感じさせる shall という語を用いた表現を取って、表面上は相手の言葉に同意するような印象を与えている。そして社会の慣例によって、絶対権を持つ当主の定めた婚礼は覆すことなどできぬとすれば、やはりそれは事実（を伝える）に違いなかった。だが、見方を少し変えれば、ジュリエット自身の拒絶の声が聞こえてくる。自分が望む結婚ではけっしてないのだ、（あなたとの）結婚は強いられたもの。その望まぬものに従うとすれば、理由は唯一つ。個の力の及ばぬ力に屈するが故。秘めた拒絶の思いがこの非人称構文表現から伝わってくる。しかも、二つの表現は予め用意されたものではなく、思いがけぬ状況に相対して咄嗟に発したものであることに注意しなくてはならない。ジュリエットにはこれだけの言葉の駆使能力が備わっており、同時に苦境にあって過度に怯まず、しかも自己を——自己の守るべきもの——見失うことのない強さも備わっているのである。

パリス拒絶

「懺悔」のため神父を訪ねたことを確かめると、パリスはこれから花婿になろうとする自分のことを（いまさら）「愛してなどいない」などと言うつもりではないでしょうね、と念を押す。それに対するジュリエットの答えはまた絶妙である。神の教えに背いた罪を悔いる「懺悔・告解」は神の代理人である神父に向かって為すべきもの、従って「それは神父様、あなたにお話ししなければなりませんわ」とまず答えておいて、暗にパリスの退出を促すのである。引用文第六行目 To answer that, I should confess to you の you はローレンス神父を指す人称代名詞である。帰る気配のないパリス（先の「愛していないなどと言うべからず」と釘を刺すパリス）にかまわず、ジュリエットはパリスではなく神父に向かってこう答えるのである。「あなた様に打ち明けねばなりません。あの方を愛しておりますと。」英語ならではの曖昧さを醸し出す表現と言えよいであろうか。注目すべきは、三人称人称代名詞 him である。ジュリエッ

ト自身がこの him という語に託しているのはマンチュアに逃れたロミオに他ならない。だが、今神父の方に向かって語りかけるジュリエットを傍らで見ているパリスは、当然のことながら自分のことだと信じて疑うはずもない。「あの方(この方)」とは二日の後には「花婿」になるこの自分のことだと思っただけでジュリエットの I will confess to you that I love him (1.25) という言葉を聞いているのである。そしてまさに、その勘違い、思い込みこそ、ジュリエットの狙いであった。同じ語がパリスの耳にはパリス自身を指す him として聞こえ、彼女の耳には遠い町に在る愛しいロミオを指す him として聞こえる。そうすれば、パリスに疑われることなく真実を語るができるのであった。言うまでもなく、二人の手を取って神聖な愛の誓いを立てさせた神父の耳にもジュリエットと同じく、その him はロミオと聞こえていた。

なんと「あっぱれ」なるかな、14歳の乙女！ジュリエットの知性と勇氣に喝采，である。毫も疑わぬパリスはむしろ女の愛を確信して安堵したか、涙でその美しい顔(かんばせ)を損なってはならぬ、などと論し、はや「夫」気取りである。

Paris: Poor soul, thy face is much abused with tears.
 Juliet: The tears have got small victory by that,
 For it was bad enough before their spite.
 Paris: Thou wrong'st it more than tears with that report.
 Juliet: That is no slander, sir, which is a truth,
 And what I spake, I spake it to my face.
 Paris: Thy face is mine, and thou hast slandered it.
 Juliet: It may be so, for it is not mine own.

(Act IV, 1, 29-36)

私の顔など「美しい」などと誇れるほどのものではありません。[涙にかき濡れる]以前から私の美しさなど損なわれていたのですから。美しさを自ら否定するジュリエットに、涙に加えてそのような誹謗で自分の天賦の美をなお損なってはならぬと制すパリス。だが、それは相手を称賛し、いたわる優しさから発した言葉ではない。(優しさが皆無であるとは言わぬが)パリスをしてそう語らせるのは、婚礼を挙げる前から既に「夫」としての妻に対する所有権に他ならない。引用文第七行目の言葉がその証しである。「君の顔は(夫である)僕のもの。その大切な僕の宝、それを君はたった今貶してしまったんだよ」Thy face is mine ——この短い四語の言葉の中に、女の愛を一人合点に確信し、夫としての自信と威厳を我知らず知らしめようとする、なかば無意識の欲求が顕れている。しかも、驚くべきことに、この引用文の冒頭から突然、パリスはジュリエットに呼びかける人称代名詞を you から thou へと転じるのである。いうまでもなく thou は you とは違って親密さを暗示する。パリスはこの語を用いることが当然許されるとの確信を得たが故に、ジュリエットを今、you ではなく thou と呼ぶのである。そしてその確信の決め手になったのは、先に解説した him に関する「幸福な」聞き違いであった。自ら意図した曖昧な言葉の(用い方)に端を発したこととはいえ、このパリスの独り善がりの自信と、thou を用いての「君、お前」呼ばわりはジュリエットにとって不快であったに違いない。しかし、事を荒立てず、一刻も早くパリスを退散させるためには忍耐するよりほかない。「そうですわね。僕のものと言って(あなたが大切に思って)くださる私の顔、悪く言い過ぎたかもしれません。もはや、私だけのものではないのですから」嫌悪も拒絶もおくびにも

出さず、そう応えて素知らぬ顔のジュリエットである。そして、ここでも彼女は巧妙に自分の言葉に二義を持たせることを忘れはしない。見逃してならないのは引用文末尾、It may be so, for it is not mine. の後半である。ジュリエットは「この顔は私自身のものではない」のだからと言うとき、声には出さぬが実は暗に「ロミオのもの」だと言っているのである。ところが、これから自分の妻になろうという女が、実はロミオと密かに婚礼の儀を果たしているとは露とも知らぬパリスは、「夫」たるものは自分をおいて他にあるはずはなく、for it[my face] is not mine という言葉を当然ながら、for it[my face] is yours すなわち「パリス様、(この私の顔は) あなたのものですから」という含みを持たせた言葉として聞いたのであった。

こうしてすっかり安堵したパリスは、木曜日(婚礼の当日)の朝には花嫁となるあなたを迎えに行くからと言いつつ残して、立ち去る。しばしの別れの寂しさは接吻が癒してくれるとでもいうのか、Till then adieu, and keep this holy kiss (1.43) と言って、ジュリエットに抱擁を与えて庵を出て行くのである。

さて、思いがけずパリスと出くわしたジュリエットであったが、内心の動揺を露わにすることもなく、見事に未来の貞淑な妻を演じて見せたのである。パリスへの愛が確かなものであるかのように言葉に含みを持たせながら、その実、真に愛する人ロミオへの愛の表明をやったのけるジュリエットは、この第四幕一場でも一段とその自立性を高めていく。婚礼の儀を経ることなく、既に夫の権限(正確には、夫に付随すると信じられている権限と言うべきか)を行使して憚らぬ男を前に、決してその隠然たる力に屈しないのである。それは、この場面に先立つ一大試練の場、第三幕五場(特に後半)において父と母、そして乳母、と最も身近な人々を欺いた時のジュリエットを支えたものがまさしく「孤独の中での自立性」であったことを思い起こさせる。あの時も、巧みに言葉を駆使して——言葉に二義を含ませるという意味で巧みに——ジュリエットは己を貫いてみせた。彼女は孤立すればするだけ、不安に捕われはするが、本来の自立した精神をより強くしていくと言ってよかった。

死の覚悟

しかし、こうしたある種の強さは、ひとつには、ジュリエット自身が認めているように「愛」が与えたものであるかもしれない。そして、愛を貫くためには己の命を惜しまぬ、といった決意が心の内に芽生えていたからであったかもしれない。第三幕五場の終わり、助けを求めてローレンス神父の元に向かう時、I'll to the Friar to know his remedy; / If all else fail, myself have power to die. (Act III, 5, 241-242) と言うその言葉にも既に、死の覚悟が窺える。更に遡って思い起こせば、父母に対して、不本意の「結婚」を強いられるほどならば死神を夫に迎える方がよい、といった意味のことを口にしてしているジュリエットであるから、ロミオとの惜別に涙するあの場面の前後の時期に、既に、漠然ではあったかもしれないが、「愛」が脅かされる不安と背中合わせに「死」の予感というものが胸の奥深いところで疼き始めていたのではないか。「後朝の別れ」の場面の終わり、ロミオの死を予感するジュリエットは怯えるが、Methinks I see thee now, thou art so low, / As one dead in the bottom of a tomb. (Act III, 5, 55-56) その時(口には出さぬが)自らの死をも予感したのではなかったか。

そして、その予感はやがて覚悟に変化していく。パリスとの婚礼を強く迫る父母との対決、そして訣別。乳母の裏切りと訣別。ロミオがマンチュアに発った後の孤独の中で迎えた窮地は、逆にジュリエットを強くした。ヴェローナにあって、いわば四面楚歌の苦境に取り囲まれながら、なお愛の純潔を守ろうとすれば、許される最後の拠り所は「死」をおいて他にない。

ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず(2)

漠然と抱いたに過ぎなかった「死の予感」は，孤立と窮地の中で自らが積極的に選ぶ「死の覚悟」へと変様するのである。ローレンス神父の元を訪れた時のジュリエットは，まさにこのような覚悟を胸にしていた。

Juliet: And ere this hand, by thee to Romeo's sealed,
Shall be the label to another deed,
Or my true heart with treacherous revolt
Turn to another, this shall slay them both:
Therefore, out of the long-experienced time,
Give me some present counsel, or, behold,
'Twixt my extremes and me this bloody knife
Shall play the umpire, arbitrating that
Which the commission of thy years and art
Could to no issue of true honour bring.
Be not so long to speak, I long to die,
If what thou speak'st speak not of remedy.

(Act IV, 1, ll.56-67)

引用文中に示されているのは，一貫してジュリエットの死の覚悟である。その前半で示される覚悟とは，(強いられた結果であったとしても)ジュリエット自身に心変わりが生じてロミオと交わした「愛の誓い」を破ってしまうようなことが起これば，いや，起こってしまわぬうちに，持参した短刀をもって，裏切りを働く(恐れのある)心を(誓いを立てた)手もろとも亡きものにしてしまう，というものである。引用文第二行目 another deed とはロミオとの結婚とは別のもの，すなわちパリスとの婚礼を指す婉曲表現であり，第四行目 this は隠し持ってきた短刀を指す代名詞であり，この時ジュリエットは短刀を掲げながらローレンス神父に愛を死守する覚悟を語っているものと思われる。

引用文後半の冒頭には，神父の長い人生経験と信仰生活から与え得る助言があるなら，是非に授けて欲しい，名案のあるものなら，この苦境を逃れ「愛」をまっとうしたいと願う思いが語られる。しかし，ここでも死の覚悟は強調されるのである。なぜなら，ジュリエットは自分は長くは待てない，今すぐにも知恵が欲しい——即刻この場で解決策が得られないなら「死」を決行すると神父に迫っているからである。引用文末尾の言葉 Be not so long to speak, I long to die (l.67) は，緊迫した心理状態を伝えると共に，あたかも彼女が，死によって幸福を約束されると信じているかのような印象さえ与える。

「死」をも厭わぬ覚悟を耳にすると神父ローレンスは，秘策があると言ってジュリエットを安堵歓喜させる。彼は神に仕える傍ら，薬草を育て，その調合にも精通しており(英語では art なる語を用いてこの才を表している)その知識と能力をここで生かすことになるのである。彼は，ジュリエットに42時間の仮死状態をもたらす妙薬を与えてパリスとの婚礼を回避させることにする。ジュリエットが眠りからさめる頃にはマンチュアからロミオが迎えに訪れ，二人して愛の逃避行を遂げる。その後，時を見計らって神父が真実を明らかにし敵対する両家の和解に導こうという計画である。

実際には、この妙薬を手にしていよいよ決行という瞬間を前に、ジュリエットは死への恐怖を始めとして様々な不安に怯える（第四幕三場）。しかし、最後の頼みの綱としてローレンス神父を訪れた時のジュリエットは偽りなく、愛を死守する覚悟でいたのである。それは、ジュリエットの決意がどれほど信じるに足りるものか、確かめるかのような神父の言葉に対して、14歳に満たぬ乙女でなくとも恐怖に怯え、戦慄しても不思議のないような数々の恐ろしい光景を挙げ、どれひとつとして自分は恐れ怯むことなく立ち向かってみせると宣言する、その言葉から窺い知ることができる。そして、その勇気はやはり「愛」への信頼から生まれるものであった。And I will do it without fear or doubt, / To live an unstained wife to my sweet love. (Act IV, 1, ll.87-88) ジュリエットが望むことは唯一つ。ロミオに掲げた愛を汚すことなく、その妻としての貞節を貫くことであった。

神父のかすかな懐疑も薄れ、彼が、秘薬の効用がいかなるものかを説明し、密かな計画、ロミオとの再会と逃避行の計画を語り終えるや、待ちかねたように「すぐにも下さい、私に！」恐ろしくなどありませんと叫ぶジュリエットである。

Friar Lawrence: And this shall free thee from this present shame,
If no inconstant toy, nor womanish fear,
Abate thy valour in the acting it.
Juliet: Give me, give me! O tell not me of fear.
Friar Lawrence: Hold, get you gone, be strong and prosperous
In this resolve; I'll send a friar with speed.
To Mantua, with my letters to thy lord.
Juliet: Love give me strength, and strength shall help afford.
Farewell, dear father.

(Act IV, 1, ll.118-126)

「一時の思いつき」の如き勇気が挫けてしまったり、眠っていたはずの女々しい弱さが目覚めて恐怖に駆られたり、そのようなことさえ起きなければ、万事うまくいくはずだ。いよいよ、42時間の眠りを誘う「秘薬」を飲み干そうという時になって、とたんに恐ろしくなってしまったのでは、困る。万事休すだ。暗に、ジュリエットの健気な決意を案じる神父の言葉を打ち消すように O tell not me of fear と叫ぶジュリエットは、内心恐怖していたのかも知れぬ。何故なら、愛の神に助けを求めているからである。

「愛の神、キューピッドよ、わたしに力と勇気を与えておくれ。」愛の力さえあれば勇気が備わり、必ずや、そら恐ろしいこともやってのけることができるというもの。「秘薬」は、まさに死が訪れた時のように、人間の体の中の血という血を凝らせるという。そのような恐ろしい「仮の死」から蘇ることが本当にできるのか？ そして愛しいロミオとの再会も儚い夢のままに終わることはないのか？ こうした限りない不安と恐怖を鎮めるのは「愛」をおいてなかったのである。

第八章 ジュリエット： 死との対決、そして受容

第四幕二場、ローレンス神父の元からジュリエットが帰ってくると、キャピュレット家では

ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず(2)

木曜日の婚礼を控えて，その準備のために皆は余念がなかった。当主のキャピュレットは，娘が神父から授けられた秘策を胸に帰って来たとは知るよしもなかった。

Capulet: What, is my daughter gone to Friar Lawrence?

Nurse: Ay forsooth.

Capulet: Well, he may chance to do some good on her.

A peevish self-willed harlotry it is.

Enter Juliet.

Nurse: See where she comes from shrift with merry look.

Capulet: How now, my headstrong, where have you been gadding?

Juliet: Where I have learnt me to repent the sin

Of disobedient opposition

To you and your behests, and am enjoined

By holy Lawrence to fall prostrate here

To beg your pardon.

[*She kneels down*]

Pardon, I beseech you!

Henceforward I am ever ruled by you.

(Act IV, 2, 10-20)

乳母から，ジュリエットがローレンス神父の元に出かけたと聞いたキャピュレットは，僅かながら娘の改心を期待する。神父に諭されればその愚かしい我儘を恥じ，親の意に背いたことを悔いて，己の無知な考えを改めて帰って来るかも知れない，と。そしてその父の思いを察知したかのように，帰宅したジュリエットは「明るい嬉しそうな顔」をして入って来たのである。但し，その笑顔は演技としての笑みであるばかりではない。パリスとの婚礼を父母から突きつけられるという窮地を免れる「秘策」を得たが故に，そしてロミオとの再会も夢ではなくなったが故に，抑えきれず浮かべる笑みでもあった。乳母も父もその笑みに隠された真実には気付かない。むしろホット安堵したのである。しかし，まだ怒りの炎が燦るのか「石頭の小娘どこをうろついていた？」と憎まれ口によって迎える父親である。

だが娘は，父の挑発的な言葉に過剰な反応はしない。「お父様の仰る事に背こうとした，不従順の罪を悔いてまいりました」ジュリエットは開口一番，自己の非を認め謝罪したのである。しかも神父の教え通り「ここにこうして頭を垂れ，膝を深く折り」お父様にお詫びいたします，と完全な改悔の意を示したのであった。それは父にとって思いがけぬ恭順であった。あまりの変化に驚き，一瞬言葉を失った父は娘をただ見つめるばかり。そこへまるで留めを刺すかのように娘の言葉が続く。「これから後はどんな事があろうと，いつもお父様の仰る通りにいたします」あれほど強行に「婚礼」を拒んでいた娘が，なんとたった今，何事も父の望むまま，命ずるまま，どのようなことであれ従う覚悟であると言ったのである。引用文中末尾の言葉 I am ever ruled by you はまさに，為政者に絶対服従を誓う従者の「忠誠」の誓いである。父親に対する絶対服従を自ら宣する娘にたちまちキャピュレットは態度を和らげる。そして喜びのあまり，すぐに花婿パリスに使いを出せと家人に命じる。

Capulet: Send for the County, go tell him of this.
I'll have this knot knit up tomorrow morning.
Juliet: I met the youthful lord at Lawrence's cell,
And gave him what becomèd love I might,
Not stepping o'er the bounds of modesty.
(Act IV, 2, 22-26)

パリスとジュリエットの婚礼を、まさか一日繰り上げて水曜日の朝に決行してしまうなどという唐突かつ乱暴な変更命令が待っていようとは！父親の口から発せられた言葉 I'll have the knot knit up tomorrow morning (1.23) をジュリエットは、信じ難い思いで聞いたにちがいない。しかし、自ら無条件の服従を誓ったばかりである。「それは初耳、承服できかねます」とは言えなかった。出来得る限り平静を装って答える。「実は、パリス様とはお会いしました。そこで、乙女に許される貞淑の徳に相応しい限りの礼を尽くして（花嫁となる女の）愛をお示しして帰って参りました。」だが、彼女の内心は嵐に見舞われていた。木曜日早朝の婚礼に備えて水曜の夜（すなわち明日の夜）、例の秘薬を飲む手はずであったのが一日早まってしまったのである。今夜決行せざるを得ない。明日の夜の決行でさえ未だ十分に心の準備が出来ているとは言い難いジュリエットである。それを「今夜、飲み干さねばならぬ」とは、あまりに情け容赦のない運命の展開であった。「死」の覚悟は既にできているとはいえ、矢継ぎ早やに迫って来る新たな決断の波に見舞われては、やはり困惑せずにはおれまい。だが、ジュリエットは持ちこたえる。ローレンス神父の庵から帰宅した折、満面に浮かべたその merry look (1.14) をもって父と乳母を欺いたように、ここでもなんら同様は見せず平然と答えたのである——あたかも、（ローレンス神父の庵で出くわした）パリスとは相思相愛の愛を交わしてきたばかりであるかのように。

さてこうして、改悛と従順を見事な演技によって演じきり、父を安堵させることに成功するジュリエットであったが、己の示した恭順は計らずもパリスとの「婚礼」を早め、秘策の決行をその日のうちに迫ることになったのである。やがて自室に一人残されたジュリエットは、いよいよ孤独の中で再度自己と向き合うことになる。

Juliet: Farewell! God knows when we shall meet again.
I have a faint cold fear thrills through my veins
That almost freezes up the heat of life:
I'll call them back again to comfort me.
Nurse! — What should she do here?
My dismal scene I needs must act alone.
Come, vial.
What if this mixture do not work at all?
Shall I be married then tomorrow morning?
No, no, this shall forbid it; lie thou there.
[Laying down her dagger.]
(Act IV, 3, 14-23)

引用文中第六行目 My dismal scene とあるように、「仮の死」に過ぎないとは言え、42時間にも及ぶ長い眠りを招く妙薬を飲み干すことは、やはり空恐ろしいことであった。^(注9) 想像しただけで血の凝る(こごる)思いがして、家人を呼び戻したい衝動に駆られる。現に「ばあや！」と叫んでしまった。だが、呼び戻したところで真実を打ち明けるわけにはいかないのだ。もはや信用のならぬ人物として彼女との絆は断ち切ったはずであった。「いくら恐ろしくとも、ここは耐えて自分ひとりでこの大事を執行しなくては」父も母も欺き、乳母をも欺き、彼等すべてから自己を訣別させてロミオとの愛に遵ずることに決めた彼女であれば、今更誰に縋ろうと言うのか？ いまや手にするこの薬(の入った) vial に自分の運命を託すよりほか道はないのである。そう思い定めて秘薬の入った小瓶を手にするジュリエットであるが、ふと不安がよぎる。

「もしも、薬に効き目がなかったならどうなるのか？」「仮死」の如き眠りが訪れなかったなら、そのまま朝を迎えてしまったなら、あのパリスの花嫁になるのか？—— おお、いやだ！ そんなことなど起ってなるものか。万が一の折には(薬が何の役にも立たなかった折には)私にはこれがある。引用文末尾 this shall forbid it の this とは、隠し持つ短刀を指す。神父の前で「死の覚悟」を語り聞かせた、あの時に持っていたものと同じ短刀である。その短刀を手に「この短刀がそのような忌むべき運め(パリスとの婚礼)を必ずや阻んでくれるはず」と語るジュリエットの言葉から窺えることは唯一つ。万策尽きたと感じたそのときは、自決による愛の遵守という決意である。ローレンス神父の考えた秘策が万一失敗に終わった場合の身の処し方は、彼の元を訪ねる以前から抱いていた「死の覚悟」そのままだったのである。何であれ、ロミオとの間に交わした愛の誠を汚そうとする者があれば、その忌むべき力の及ぶ前に己の命を立ててしまう、というのである。先の引用文にある言葉 No, no, this shall forbid it; とはまさにこの覚悟を端的に表した言葉である。そして更に続く言葉 lie thou there は、ジュリエットが手にする「短刀」に対して「真の友」に抱くような親愛の情を伝えていて興味深い。人称代名詞 thou を用いることによって、ジュリエットと短刀はもはや人と物ではなくなったのである。「短刀」をもはや命を持たぬ「物」ではない。ジュリエットは今、己の中の「命」を賭してでも守らねばならぬものを託そうとする相手、命ある友、信頼すべき友に語りかけているのである。

このように見てくると、引用文末尾の一文 No, no, this shall forbid it; lie thou there を口にするジュリエットは『アントニーとクレオパトラ』の中のクレオパトラを思い起こさせる。劇の終盤、オクテイヴィアス・シーザーの意図を欺き、死を持って難を逃れ(ローマ市中を戦利品として引き回されるという恥ずべき難)己の女王としての誇りを守ろうとするクレオパトラは(自分に最もふさわしい)死の手段として毒蛇 asps (但し、複数形)を選ぶが、その毒蛇を胸に当てる時、やはり thou という人称代名詞を用いて語りかけるのである。^(注10)

ともかくもジュリエットは、「短刀」をベッドの端に置いていざという時に備えて「大事」に望もうとする。しかし、その決死の覚悟とは裏腹に、薬を飲み干すその瞬間まで様々な不安と疑いに襲われるのも事実であった。上記のように薬の効用を疑うだけでなく、神父の意図にも不安と疑いを抱いたりもする。^(注11) 更には、たとえ薬が効いたとしても、目覚めが早すぎて、死体安置所に彷徨い出てくる死者の霊に怯えるのではないか、ロミオの到着まで耐えられるのかと慄く自分の姿を想像したり、はてはロミオの刃に倒れたティボルトの幻覚を見て恐怖の声を挙げる。そして最後には、愛しい人口ロミオの名を連呼することで恐怖と不安を振りきるように、ひと息に秘薬を飲み干すのであった。Romeo, Romeo, Romeo! Here's drink —— I drink thee. (Act IV, 3, 57)

第四章三場は短い場面であり、その焦点はヒロイン、ジュリエットが意を決して秘薬を飲み干す様子を描くことにある。しかし一方で、彼女の胸の内に秘められている「死の覚悟」がここでも強調されていることを見逃してはならない。第三幕五場において暗示的に描かれた「死」の予感、その後次第に「愛の遵守」の決定的手段としての「死」がジュリエットの口から繰り返り語られるようになっていく。そしてその死の決意は、最後の頼みの綱と思われた妙薬を用いた秘策決行の際にも、再び彼女自身の言葉となって—— *this shall forbid it; lie thou there* (1.23) —— 暗示的に表わされるのである。果たしてこの先、ジュリエットの内なる決意は変わることなく彼女の胸のうち深く宿り続けるのであろうか。

第九章 ジュリエット： 愛と死

第四幕三場の終わり、ロミオとの再会を願って42時間の眠りに誘う「秘薬」をあおったジュリエットであったが、その後彼女が再登場するのは第五幕三場——長い眠りから目覚めの時を迎える場面——に至ってからのことである。そしてこの42時間に及ぶ仮死の眠りに身を委ねている間に、予期した通りに婚礼の中止が宣言され、ジュリエットの葬儀が執り行われる。しかし人々の悲しみを招く出来事はそればかりではなかった。

第五幕三場、ローレンス神父が角灯を掲げ、鍬を手に現われる。手はず通りに事が運んでいけばロミオがマンチュアより帰郷し、ここキャピュレット家の死体安置所にやって来るはずであった。だが、この時の神父は胸騒ぎを覚えていた。知人（ジョン神父）に託したロミオへの手紙は届いていなかったのである。

Friar Lawrence:

Romeo!

[Friar stoops and looks on the blood and weapons.]

Alack, alack, what blood is this which stains

The stony entrance of this sepulchre?

What mean these masterless and gory swords

To lie discoloured by this place of peace?

[Enters the tomb.]

Romeo! O, pale! Who else? What, Paris too?

And steeped in blood? Ah, what an unkind hour

Is guilty of this lamentable chance!

[Juliet rises.]

The lady stirs.

Juliet: O comfortable Friar, where is my lord?

I do remember well where I should be;

And there I am. Where is my Romeo?

(Act V, 3, 139–150)

死体安置所の入口の敷石が血痕で汚され、あたりに散乱する刀を目にして恐怖と不安に捕われたローレンス神父は、安置所の中に降りていきなり驚愕する。我が目を疑った。死して横たわるロミオの蒼ざめた顔、その傍らに倒れたパリスの亡骸。それが一時に（いちどきに）目に入ってきたのである。「なんという「時」の残酷なる仕業！」声を荒げ立ちすくむ神父。一体

何故このような事が起きてしまったのか?! 彼には見当もつかず，ただ驚き恐怖するばかりである。Ah, What an unkind hour / Is guilty of this lamentable chance! 神父の嘆きの叫びに目覚めを促されたか，ジュリエットが長い眠りから蘇る。

「ああ，(おやさしい) 神父さま。私の夫は何処ですか?」当然ながら彼女は，待っていてくれるはずの愛しい人口ミオの姿を求める。(神父の) 答えを待てぬジュリエットはなおも尋ねる，「姿の見えぬその人，私の愛しい口ミオ様は何処に?」と。此処はたしか私が運ばれて来るはずであった場所。そして私自身はここにこうして間違いなく居りますのに「あの方」の姿が見えないのは，一体どうしてなのでしょう? 引用文末尾の言葉 And there I am. Where is my Romeo? にその夫恋しさと不可解な不満がこもる。戻ってきて下さったあの方を，再びしっかりとこの両腕の中にかき抱き，再会の喜びに浸るはずであった——それなのに，あの方の姿が見えぬ。私の愛しい人口ミオは何処に?

夫口ミオの姿を求めるジュリエットの言葉に，神父はその死を告げるより他なかった。

Friar Lawrence: I hear some noise, lady. Come from that nest
Of death, contagion, and unnatural sleep.
A greater power than we can contradict
Hath thwarted our intents. Come, come away.
Thy husband in thy bosom there lies dead;
And Paris too. Come, I'll dispose of thee
Among a sisterhood of holy nuns.
Stay not to question, for the Watch is coming.
Come go, good Juliet, I dare no longer stay.

Exit

(Act V, 3, 151-159)

引用文は，一見して分かるように，ローレンス神父の関心がジュリエットのそれとは別のところにあることを端的に示している。Where is my Romeo? と問うジュリエットの期待と不安の錯綜する言葉には答えず，「早く，ここを出なさい」と繰り返し促すのである。ここはもはや「死と穢れと不可解な(死の)眠り」の温床，長居は無用というわけである。ジュリエットのあの問いに答えを与えるのは，引用文第五行目，話し始めて既に5行に及ぶ言葉を経た後のことである。この，重大なメッセージの遅延を善意に解すれば，神父の優しさから生まれた結果と考えることも可能であろう。「お前の恋しい夫は死んだ」などといきなり告げるのは残酷と感じた神父がジュリエットの悲しみを思いやって，事が「不首尾」に終わったことを暗に告げた後，「死」を知らせたのであると。しかし，果たしてそうか? 神父は，ジュリエットの悲しみを自らも嘆き，哀れむ言葉など一度たりともを發してはいない。真に「優しさ」に動かされた遅延であるなら，嘆きに共感し，慰めの言葉を一言であれかけてよいではないか。「どれほど悲しいことか」とジュリエットを抱擁してやることもできたはずである。しかし，この時神父の心を捉えていたのは口ミオとジュリエットの愛の運命などではもはやなかったのである。

引用文の中で神父は四度に亘ってジュリエットに安置所から出る事を促している。Come from that nest / Of death..... (l.151), Come, come away (l.154), Come, I'll dispose thee.....

(l.156), Come go, good Juliet,..... (l.159) 一刻も早くジュリエットをこの場、ロミオとパリスの二人が血を流し死して横たわる忌わしい場 that nest of death, contagion, and unnatural sleep (ll.151-152) から引き離さねばならない。その理由は何か？ それは、神父自身の身の安全を図ることである。引用文末尾 I dare no longer stay が端的に彼の真意を物語っている。しかもその直前に Come go, good Juliet, と、あたかも（躊躇する）相手を宥めすかして己の意に添わせようとする言葉を口にしてに注目しなくてはならない。誰に気付かれることなく連れ出した後は、ジュリエットをしばし尼僧院に託し身を潜ませるつもりであるとも言っている。これほどまでに、ジュリエットに姿を消すことを望むのは何故か？

「わしはこれ以上ここに留まっておられぬ」と言う神父には、目の前の惨事との関わりを疑われてはならないという思いがあった。更に、パリスとの婚礼を拒み続けたジュリエット、死に至ったはずのジュリエット、そのジュリエットが息を吹き返し、今こうして神父と共に、ここ死体安置所に居る姿を見られてはならない、との思いがあった。なんらか重大なる罪を問われる恐れが十分にあったからである。第四幕五場、娘の死を嘆き悲しむキャピュレットを「見苦しい、恥を知れ」とばかり叱責し、神の御手に乙女ジュリエットの命を委ねる覚悟をせよ、それこそがジュリエットの幸せと諭した神父は、いかなる弁明をする事ができるのか。しかも、今死者となったロミオとジュリエットの秘密の結婚の儀を執り行ったのも神父である。加えてそのロミオの傍らに、キャピュレット家公認の婚約者パリスまでもが刃に倒れ死者となってしまうとすれば、それら諸々の恐ろしい事実が招くであろう大いなる窮地を想像して震撼せずにはおれなかったのである。

アーサー・ブルックの描く神父にも、同様の、いや更に強い自己保身を感じさせる一面を窺うことができるが、シェイクスピアの作品においては、表わし方は曖昧ながら、注意して読むとその言葉の端々に彼自身の思惑、利害への関心が浮かび上がってきて興味深い。

神父との訣別

さて、こうした神父の思惑をジュリエットが察したか否か定かではない。ただ、Come という言葉を繰り返すその言葉を耳にしながら、あるひとつのことへと己の心を向けていったことは確かである。ジュリエットに神父の指示に従うつもりはなかった。

Juliet: Go get thee hence, for I will not away.
What's here? a cup closed in my true love's hand?
Poison I see hath been his timeless end.
O churl, drunk all, and left no friendly drop
To help me after? I will kiss thy lips,
Haply some poison yet doth hang on them,
To make me die with a restorative.
Thy lips are warm.

Captain of the Watch: [Within] Lead, boy, which way?

Juliet: Yea, noise? Then I'll be brief. O happy dagger,
[Taking Romeo's dagger.]

This is thy sheath;

[Stabs herself.]

there rust, and let me die.

ジュリエット：自立した乙女、恋に身を投ず(2)

[Falls on Romeo's body and dies]

(Act V, 3, 160-170)

聞きようによっては事務的にしか聞こえない神父の言葉に対して、ジュリエットはまったく非難めいた言葉など返すことはない。ロミオとの再会と幸福を約束したはずではなかったかと、詰め寄ることもなければ、あるいは、いったい何がロミオの死を招いたのかと涙ながらに問うこともない。(ロミオの忠僕バルサザールがジュリエットの死を早馬にて知らせていた。ロミオは妻の後を追ったのである。)ジュリエットはただ淡々と、しかしきっぱりと己の意を伝えるだけである。「留まれぬとおっしゃるなら、神父様ご自由にいらして下さいな。この私は参りません。」激しい嘆きと悲しみを露わにする姿がそこであって不思議のない場面であるに関わらず、ジュリエットはけっして泣かぬのである。泣かぬばかりか取り乱す気配が豪もないのである。神父の九行に及ぶ説得に対して彼女が発したのは僅か一行 *Go get thee hence, I will not away* —— 感情を抑えた簡潔極まりない言葉に過ぎない。だが実は、この短い言葉にはジュリエットの神父に対する訣別の意が込められていたのである。

再三に互って「早く出よ」と安置所からの退出・退去を促した後、最後に神父が *I dare no longer stay* と言って彼自身がこの場を離れたい旨を告げるや、即座に *Go get thee hence, I will not away* とジュリエットが応じていることに注目しなくてはならない。彼女はこの時、単に、自分はロミオの元に留まるのだという意思表示をしたのではない。そこには神父に対する訣別の意も込められていた。ジュリエットをより安全な場所に招く素振りを見せつつ、最大かつ最重要の関心は自己の身の安全を図ることではないか——神父の(最後の)言葉から直観的にその真意を感じ取った瞬間、これまでの信頼と敬愛の情を捨て去ってしまうのである。ましてや、ジュリエットを襲ったロミオ喪失の悲しみを一顧だにせぬその態度。もはやこの神父の説得に応じる意味など見出せるはずもなかった。即座に「ならば、独りで去るがよい」とばかり訣別の言葉を返すジュリエットであった。彼女は、ちょうど乳母に対したと同じ様に、すなわち第三幕五場、平然とパリスとの結婚を勧めるあの乳母を見限った時と同じ様に、こともなげに *I dare no longer stay* と言う神父を即座に訣別の言葉をもって報いたのである。

そして、この言葉を聞いた神父は、それ以上はジュリエットを説得しようとはしない。後は彼女自身の意に任せて、死臭漂う危うき場から身を遠のけて自己の保身と弁明に意を用いればよいのである。

死と愛の成就

神父を立ち去らせた後のジュリエットの心を占めるのは、「いかに死すか」その一事である。引用文冒頭の一行、神父への訣別の一行を除くすべての言葉は、この一点に注がれている。ようやくにしてロミオと二人きりになったジュリエットは(辺りには過去の死者たち、そしてパリスの亡骸もありはしたが)今こそ、かねてから胸に秘めてきた決意を行動に移す時だと感じていた。第三幕五場「後朝の別れ」の朝、旅立たんとする夫ロミオにすがりつつ思わず漏らした死への不安、(このとき、ジュリエットは幻覚のようなものを目にする。「貴方が墓石の奥深く死者となって横たわる姿が見えます——私の気のせいでしょうか?」と語り、それが涙に曇る目のせい、ロミオの顔が青ざめているせいに分からぬと言いつつ、不安に怯えるのである。)あの漠とした不安が転じてはつきりと自覚する覚悟めいたものになっていく、あの「死の決意」のことである。すなわち、第三幕五場後半、父母を前に望まぬ結婚に抗うとき、繰り返し口にする「死の覚悟」、続いて第四幕一場、ローレンス神父から秘策を授けられる前後に宣する「死

の決意」,そして第四幕三場,いよいよ秘薬を飲み干し愛を貫こうとする間に再度(自己に言い聞かせるように)宣する「死の覚悟」——そのすべてが現実のものとなる瞬間を迎えていた。

引用文のジュリエットの言葉からは,死への恐怖や迷いは一切感じられない。それは彼女の中に,揺るぎない死の覚悟,死の決意,そして死の受容があるからにはかならない。その決意と受容を可能にするのは「愛」に対する信頼である。言葉を代えれば,愛の誠に殉ずるには「死」をもってロミオと一体になることを置いてないと信じて疑わないジュリエットがそこにあった。彼の世界(かのせかい:死後の世界)にあっては,ひとつとなったロミオとジュリエットを分かつものはなにも無い。「死」によって永遠の絆となった彼ら二人の愛を阻む力は彼の世界に及ぶことはもはやない。この世にあって皆の祝福を受けることのない「愛」,それ故に死という結末を迎える「愛」は確かに不幸であり,悲劇であろう。しかし,ジュリエットにあっては至福であった。いまこそ分ちがたく結び合わされる愛の成就の瞬間を迎えようとしているのであるから。そして「死」を至福として受容する態度は劇の終盤第五幕三場に至って,更に言えば,ロミオの死に遭遇する場面において初めて(唐突に)生まれたものではない。既に,本論第六章,第七章において見てきたように,早くからジュリエットは,孤独と窮地に幾度となく見舞われるうちに,死をただ怯えるものとしてではなく,自己と自己の望むものを見失うまいとする際の拠り所として,我が輩(ともがら)としていったのである。

そのことが,彼女の迷いの無さ,淡々とした潔さの源となった。そして,神父に対する淡々としていて決然たる態度をも生むこととなったのである。

そうであるからこそ,父母そして乳母との訣別を余儀なくされた後,唯一頼みとした人物ローレンス神父とも訣別したジュリエットはまったくの孤独の中に身を置くことになってもなお,精神の強さを増すのである。孤独ではあっても,かつてのようにその「孤独・孤立」をもはや恐れはしなかった。「死の決意」と「愛への信頼」が,そしてなにより帰ってきたロミオがそばにいて彼女に力を与えた。彼の地(かのち)で待つロミオの魂とその愛に邂逅するため,「死の旅」に向かう心の準備はすでに遂げていた。

ジュリエットはロミオの死を告げられ,その死を招いたものが *a greater power than we can contradict* (Act V, 3, 153) であるという神父の言葉を耳にしたとき,もっと早い時期に予期し,なかば畏れた「運命の女神 (Fortune)」を連想したのではなかったか。彼女は,第三幕五場冒頭,涙ながらにロミオとの別れを惜しんだ直後,「気まぐれ」と名高い運命の女神に向かって *O Fortune, Fortune, all men call thee fickle* (Act III, 5, 60) と呼びかけて(気まぐれの悪戯に飽いたなら)一刻も早く「愛しの人を返して」欲しいと独り語りに語っている。おそらく,その独り語りがこのとき蘇ってきたのではないか。第五幕三場の *a greater power than we can contradict* という神父の言葉は即座に,第三幕五場で畏怖した *fickle Fortune* 気まぐれなる運命の女神の姿を思い起こさせた。そしてまた,今まさしく「墓所の奥深くに眠るロミオ」を目にしたジュリエットは,恐ろしい予兆に怯えて漏らした我が言葉を思い起こしていた —— *Methinks I see thee now, thou art so low, / As one dead in the bottom of a tomb.* (Act III, 5, 55-56) あの予兆が現実となって彼女の目の前に現れたのである。だが,ジュリエットは泣かなかった。運命の女神の *fickleness* に怯えることもなく,号泣することもなく,ただ静かに受け入れたのである。そして,(既に詳しく見てきた通りに)神父の言葉 *Come go, good Juliet, I dare no longer stay* (Act V, 3, 159) には動じず,己の内なる決意に従ったのである —— *Go get thee*

hence, I will not away. (Act V, 3, 160)

毒をあおったロミオが(私には)一滴も残してくれなかった!と知って、なんと意地悪な方! O churl, drunk all, and left no friendly drop / To help me after? と恨めしくなるジュリエットは、その唇に接吻することで同じ毒の薬効を得ようとする。それもままならぬと分かって途方にくれるところへ警護の者の声。「急がねば」と気がはやるなか、短刀が目に入り、「天の助け」と叫ぶや刃を胸に突き立て、果てる。瞬時の出来事である。ロミオの腰から短刀を抜いて「我が胸を鞘にせよ (This is thy sheath)」とその胸にあてがうまで、僅か一行半の結末。それは、『アントニーとクレオパトラ』の終幕、クレオパトラがアントニーの元に「花嫁」となって赴かんと、毒蛇 asps を胸にあてがう、あの場面と比してなんという短さであろうか。また、なにひとつ演出されたところのない「死の描写」である点も実に対照的である。ジュリエットの死はクレオパトラの願ったような「美」を意図したものではない。また、入念に死の瞬間と死の手段を求め、自己にとって最もふさわしい「死」を逃げようと図るわけでもない。(クレオパトラにはエジプト女王の誇りが非常に強く、彼女の死にはその誇りを死守する意味もあった。)従って、死を演じることなど問題外である。しかし、死の覚悟——しかも己の守るべきものははっきりと自覚し、それを死守するという覚悟——に沿った死を逃げる点においては両者は同じである。そして、愛する者と自己との愛に「永遠の命」を与えんとする願いにおいても共通していた。

ジュリエットが死の瞬間に口にする言葉 O happy dagger, / This is thy sheath; / there rust, and let me die. (Act V, 3, 169-170) には装飾性はまったくない。しかし、その言葉は簡潔ながら、彼女の中に秘められてきた「死の決意」と「愛の遵守」への願いを物語って余りあるものがある。彼女はクレオパトラのように「美」なる死を演じはしなかったが、己の愛を貫き、自らの選んだ死の眠りについたのであった。

* * *

福田恒存の指摘するところによると、シェイクスピアは『ロミオとジュリエット』の二人の恋人達には同情的であったが、恋そのものに同情的であったわけではない、と言う。^(注12)そしてそれは、アーサー・ブルックに通ずる一面であるとも言っている。即ち、ブルックが自作の悲劇物語詩に付した序文「読者へ」において述べた道徳律に自らも意識的に従って、恋愛に否定的であろうとしたと同じ様に、シェイクスピアもまた、恋愛に対しては批判的であったという意味のことを述べている。また、エリザベス朝時代にあっては「恋愛」を悲劇の材料にすることはかなり無理な試みであったため、それを敢えて悲劇に仕立てようとする時作者シェイクスピアの意識に作用して、時折悲劇らしからぬ喜劇的要素——猥雑な言葉や地口の冗濫など——が顔を出す結果となったとも指摘する。そしてこうした不調和は彼の恋愛に対する否定的な考えの反映と見ているようである。^(注13)

こうした観点からすれば、登場人物はジュリエットを含め、悲劇を体現すると言うよりは、終始襲い掛かって来る悲劇(悲劇的事件)に弄ばれる人物として描かれたことになるのかもしれない。そうであるとすれば、ジュリエットの恋における主導性であれ、愛の成就という悲願であれ、愛のための死の決意であれ、自己自身の意思や選択は無力なものという印象を免れなくなる。しかし、人間の為すことすべてが人の力の及ばぬ何ものかに翻弄されているかに見え

て（そして確かに翻弄されてもいるであろう）、したたかに、また健気に格闘する人間をそこに見て共感するものは少なくないであろう。確かに、シェイクスピア劇には喜劇、悲劇を問わず、「愛」というものに対する不信を感じさせる作品のあることを否定することはできない。^(注14)しかし果たして、『ロミオとジュリエット』も単に作者の恋愛に対する「シニシズム」の目をもって描かれたものであろうか。

結 論

ジュリエットが第二幕二場のバルコニー・シーンで見せた恋における主導性は、第三幕五場「後朝の別れ」の場において垣間見せる弱さ、他者への甘え、依存性によって一時的に影を潜めるかに見える。しかし、そうしたある種の弱さを見せたその直後、ジュリエットは再び精神の自立性を回復させる。それは、恋する相手を直接前にした時に見せる主導性とは違いはするが、自己の欲するところを見失わず、容易には他者の意思や欲求に依存したり屈服することのない、自立、独立した精神としては同一のものであった。第三幕五場後半（ロミオとの惜別を経た直後）において、パリスとの結婚を強要する父母の傲慢な怒り、手のひらを返したようにロミオを貶めパリス賞賛に転じる乳母の裏切り、そうしたものと対峙する時に見せるジュリエットの強さ、したたかさには、むしろ、バルコニー・シーン（ロミオと交わす求愛の言葉）から窺われる精神の自立性をはるかに凌ぐものがある。そして、揺るがぬ独立性、自立性を備えているという意味での、こうした精神の強さは劇終幕まで変わることなくジュリエットに付き従うことになる。いや、「自立した精神」は単に失われただけではない。一層、その強さを高めながらジュリエットの本質となって彼女を支えていくのである。ロミオを失い（追放の身となってヴェローナから去る）、父母の愛を失い、乳母への信頼を失い、更に終幕ではローレンス神父への信頼までも失う中で、完全な孤独を強いられるジュリエットが返って自立性を高め、精神の強さを輝かせていく、その姿は圧巻である。ジュリエット自らが口にしてるように、「愛」が力を与え、命を賭してもその愛を守り成就させる決意を促したことは疑い得ない。しかし、忘れてならないのは、彼女には本質的資質としての自立性が与えられていることである。ジュリエットに本来備わっていた、すなわち生まれながらに内に秘めていた「自立性」が、恋とそれを阻む苦境とに遭遇することによって浮上し、鍛えられ、あのように見事に一貫性をもった決断と行動へと導いたのである。

『ハムレット』のオフィーリアもまた「死」を逃げるが、その死の意味も、精神の強さにおいてもジュリエットの場合とは全く異なる。兄を失い（留学のため本国を出る）、父を失い（謝ってハムレットの刃に倒れる）、恋人ハムレット王子の愛を失い（失ったと信じている）孤独となったオフィーリアは己を見失い、狂気へ向う。無論、彼女の場合には「愛」に対する信頼が失われていたことを考慮すべきではある。だが、それでも尚、オフィーリアの言動を見る限り、「自立性」と言う点ではなきに等しいと言うほかない。両者の相違に関しては、自立した精神の有無が象徴的な意味を持っているものと思われる。単純に結論することはなるまいが、ジュリエットとオフィーリアという二人の女性人物の中に描かれた女性像の比較対照させることは大変興味深い試みであり、それぞれの特性をより浮き立たせるに違いない。

おわりに

一年の歳月を経て、再び執筆原稿を公にする機会に恵まれたことを心より幸せに思い、新たな喜びを感じています。今回の原稿は、既刊の第38巻に発表したものと合わせて初めてひとつのまとまったものとしての意味をもつものです。そうした意味でも、(論文の前半部と後半部の二つが揃った今)ある安堵感を心の中に感じています。

紀要の出版に関わり、お世話いただいた方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。本当に、有難うございました。

平成16年9月

三戸祥子

注

1. 実はロミオは、仮面舞踏会でジュリエットと出会う直前まで、ロザラインという年上の女性に憧憬の愛を抱いて悶々とし、神父の前で叶わぬ恋を憂えて幾度となく涙しており、そのことをこの第二幕三場で神父から擲諭されるのである。
2. マーキュシオ(Mercutio)なる人物がシェイクスピアによるまったくの創造であることについては、すでに多くの批評家、研究者達の指摘していることである。ケンブリッジ版テキストでは、マーキュシオを主人公ロミオの引き立て役(foil)として捉える見方も提供されていて興味深い。(広島文教女子大学紀要第38巻に投稿した拙論『ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず』の注12に示したBkakevmore Evans編注による*The New Cambridge Shakespeare Romeo and Juliet*のIntroduction, p21.) 合わせて、パリスの人物像について触れた一文も示唆に富んでいるので、紹介する。パリスが最終幕において死に至る(ロミオと争って倒れる)のもシェイクスピアの創作による劇展開であるが、このパリスに与えられる「死」という結末がこの人物にいくばくかの共感と呼び、ジュリエットと共に埋葬されることを許す、あるいはあまり違和感なく受け入れさせる結果となっているのではないか。
3. 夜鳴き鳥ナイチンゲールと柘榴の関わりに関しては、前掲のニュー・ケンブリッジ版テキストの脚注を参照した。柘榴の木は古来よりナイチンゲールとの連想を生んできたようである。ただし、夜鳴きは雄鳥によることが多いとのことである。従って、こうした連想を考慮に入れるなら、偶然にせよ、ジュリエットの生家の庭に柘榴の木が植えられていたために、ナイチンゲールの訪れを誘ったとも考えられる。その夜の鳥の声を頼りに「夜明け」を否定したのである。
4. 第三幕五場147-148行に反復されている語proudの解釈について、前掲のニュー・ケンブリッジ版テキストの脚注を参照までに挙げておく。
Proud: sensible of, pleased with, the honour (being done her)
従って「名詞」としては「(父によってジュリエットのために為された)名誉なこと」となり、「形容詞」としては、「喜びとし、感謝を感じる心を持つ」といった意味になるであろうか。
5. 第三幕五場156行のYou tarrow-faceに関しては、平井整正穂氏の訳語によれば「萎黄病にでもかかったような面をしゃがって」と成っている。(岩波文庫、1998年、初版1988年)また、小田島雄志氏は「この貧血病!できそこない!」という表現を取られている。(白水社刊、1998年、初版1985年)この例の場合、tarrowという語そのものの意味よりもジュリエットの顔色から連想する病名を採用したものと思われる。
6. 引用文中には、わずかに二度theeを用いている箇所が見られるが、全体としてはyouへの移行を強く印象づける人称代名詞の用い方となっている。
7. 第三幕五場205-208行のこのくだりでは、ジュリエットがロミオの「死」を暗示するような言葉を口にしていても注意を引く。しかし、それ以上に結婚の破棄(すなわち、神の前の誓いを天の世界に昇って貰い受けてくる、などという言葉の含意から感じ取られる、結婚の白紙化である)を望んでいるかのような示唆がジュリエットの言葉から窺える点に注意が必要である。ただ、ここでは主眼点ではないため深くは論じない。
8. 第三幕五場228行のAmenについての乳母による誤解説は前掲書、ニュー・ケンブリッジ版テキスト

を参照。英文の注釈を以下に挙げておく。

'Amen': So be it. Juliet takes the Nurse's 'beshrew' (=curse) in 227 literally and the Nurse's confusion is shown by her question ('What').

9. 第四幕三場 19 行の *dismal* という形容詞の意味については、三通りの含みを考ええることができる。
1. *fatal*: 運命的という意味での決定的な 2. *full of dread*: 恐怖に満ち満ちた 3. *miserable*: 不幸な、惨めな (ケンブリッジ版注釈書の解説を参証) この三つの含みをすべて加味し融合させた文意の取り方をして、翻訳を考える、試みるのがよいかもしれない。但し、当論文では第二番目に挙げられている「恐怖に満ち満ちた」の意味にのみ触れて解説している。他の含意を無視するわけではないが、詳説は取えてしなかった。
10. シェイクスピア作品『アントニーとクレオパトラ』の中で死を遂げるクレオパトラは自己の死に美の演出を試みる。「美」を損なうことのない死、「美」を永遠化する死を望んだのである。その演出の決め手が毒蛇であった。瞬時に死に至る猛毒が、劇中 *asp* と呼ばれて登場する蛇であるが、この蛇達に呼びかける時クレオパトラは *thou* を用いるのである。(クレオパトラの死の描写に関しては、詳細な解説を試みたことがある。『クレオパトラ、不滅の美と誇り』広島文教女子大学紀要第 29 巻, 1994 年。拙論を読んでいただけると幸いに存じます。) クレオパトラと違って、ジュリエットは死をもって愛に殉ずることが唯一絶対の目的であって、そこに演出など意図したりすることはなかった。故に、自らの肉体に刃を突き立て、流血を見ることも取えて拒まなかった、いやむしろ、心の臓に刃を埋めることで死を確実にすることを欲したのであったかも知れない。何故なら「死」こそが愛を永遠に変える唯一ひとつの道と信じていたであらうから。
11. ジュリエットの神父に対する疑いとは次のようなものである。(第四幕三場、ジュリエットの言葉より) ローレンス神父の与えた「秘薬」とは実は毒薬ではないか? ローレンス神父は、ロミオとジュリエットの神前での結婚の証人であり、それでいて、新たにパリスと婚礼を挙げようとするジュリエットを黙認すれば、神への冒瀆の罪を冒すことになる。それは神に仕える身として最も恐るべき罪の一つであり、己の恥じでもある。その罪と恥じを免れるためにジュリエットを亡き者にして、己の難を逃れようとするのではないか。救いの手を差し伸べる振りをして、自己に不利なる者を抹殺しようというのである! 秘薬を手にしつつも、こうした疑いと不安に捕われていたのである。尤も、ジュリエットはこの疑いをすぐに打ち消してはいる。「神に仕える聖なる人」*a holy man* の証を受けた人物にそのような疑いをかける要はない、と思直すのである。
12. 福田恒存は、「シニシズム」という言葉を使ってシェイクスピアの恋愛に対する否定的な(非同情的な)見方を表している。彼は、『ロミオとジュリエット』に見られる喜劇的要素は、後年の悲劇に意図的にかつ効果的に(悲劇的效果を高める上で効果的)挿入される「コミック・リリーフ」とは別のものだとしている。ウィリアム・シェイクスピア作、福田恒存訳『ロミオとジュリエット』、「解題」より、研究社、東京、1964 年。
13. 上掲書、p168-170。
福田恒存は、『ロミオとジュリエット』に凶らずも現われたシェイクスピアの否定的恋愛観を「無意識の「シニシズム」」と評しているが、それに通ずる見方を次の二人の批評家に見出した。サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson)アーサー・クイラクーチ(Sir Arthur Quiller-Couch)である。登場人物の苦しみ、悲しむ姿を「悲しい独相撲」と称したジョンソンの弁を引いたり、「自己欺瞞の喜劇」という言葉をもってシェイクスピア喜劇の登場人物評をしたクイラクーチの言葉を借用して『ロミオとジュリエット』を「自己欺瞞の悲劇」と称している。
14. 問題劇とされる、『トロイラスとクレシダ』『終わりよければすべてよし』『尺には尺を』がそうであり、又『から騒ぎ』にも愛の不信を感じさせる要素があると言ってよい。

* 尚、本文において用いた引用はすべて、*The New Cambridge Shakespeare, Romeo and Juliet*, edited by G. Blakemore Evans, Cambridge University Press, 1984 からのものである。

参 考 文 献

1. William Shakespeare, *The New Cambridge Shakespeare, Romeo and Juliet*, ed., G. Blakemore Evans, Cambridge University Press, printed in Cambridge, Great Britain, 1989, first published in 1984.
2. William Shakespeare, *The Arden Shakespeare, Romeo And Juliet*, ed., Brian Gibbons, Methuen & Co. Ltd, New York, USA, 1984, first published in 1980.
3. ウィリアム・シェイクスピア作、市河三喜・嶺卓二注釈、研究社詳注シェイクスピア双書『ロミオと

ジュリエット：自立した乙女，恋に身を投ず(2)

- ジュリエット』，研究社出版，東京，1995年，初版1963年。
4. ウィリアム・シェイクスピア作，岩崎宗治編注，大修館シェイクスピア双書『ロミオとジュリエット』，大修館書店，東京，1988年。
 5. ウィリアム・シェイクスピア作，平井正穂訳『ロミオとジュリエット』，岩波文庫，岩波書店，東京，1998年，初版1988年。
 6. ウィリアム・シェイクスピア作，小田島雄志訳『ロミオとジュリエット』白水社，東京，1998年，初版1985年。
 7. ウィリアム・シェイクスピア作，福田恒存訳『ロミオとジュリエット』研究社，東京，1964年。
 8. アーサー・ブルック作，北川悌二訳『ロミアスとジュリエット』北星堂書店，東京，1979年。
 9. ジェフリー・チョーサー作，宮田武志訳『トゥローイラスとクリセイダ』こびあん書房，東京，1987年。
 10. エドガー・ウィン特著，田中英道・藤田博・加藤雅之訳『ルネッサンスの異郷秘儀』晶文社，東京，1995年，初版1986年。
 11. Ellen Terry, *Four Lectures on Shakespeare*, UT Back-in-Print Service represented in Japan by Maruzen Company, Limited, first produced on acid-free paper at the University of Toronto, Canada in 2001 using digital imaging technology.
 12. エレン・テリー著，高橋檀訳『シェイクスピアの女たちと子供たち』，大阪教育書出版社，大阪，1995年，初版1984年。
 13. エレン・テリー著，栗駒正和・塗木桂子編注，『シェイクスピア劇の女性たち』，大阪教育図書出版社，大阪，1984年。
 14. 大山敏子著，『シェイクスピアの愛と伝統』，研究社，東京，1983年，初版1976年。
 15. 青山誠子著，『シェイクスピアの女たち』研究者選書17，研究社，東京，1984年，初版1981年。
 16. 楠 明子著，『英国ルネッサンスの女たち』，みすず書房，東京，1999年。
 17. 塩野七生著，『ルネッサンスの女たち』中央公論社，東京，1969年。
 18. 松本 寛著，『シェイクスピアの全体像』，研究社，東京，1986年。

—平成16年9月28日 受理—